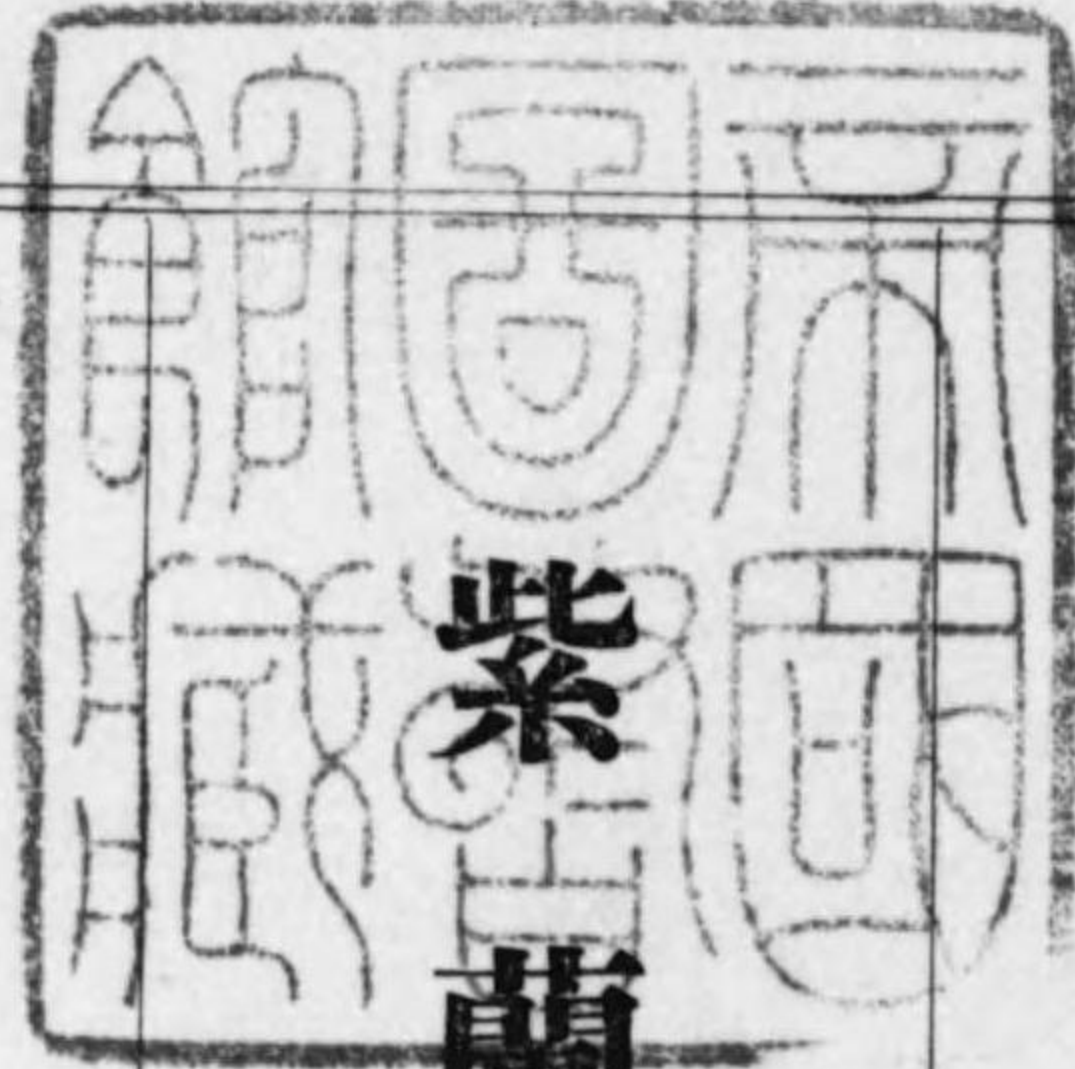




始



時232
658



若月紫蘭著

紫蘭句集

新月社發行



紫蘭句集



目次

紫蘭句集……………一〇元
 生きる爲の文藝……………一〇元
 近代藝術思潮講話綱目……………五〇—五四
 文藝講話……………一〇元
 明治前俳句抄……………一—三
 明治時代俳句抄……………三—六
 昭和時代の俳句抄……………九—四

曉集 (自昭和五年至昭和九年四月)



春風引いて炬燵を抱いておらが春
 人を食ったよな萬歳が来る門しめろ
 春風引いてさて年始かな

横町の羽子の音曲つて霞みけり

拍子木の音今夜は少し暖き

元日も飯五錢汁一錢の命かな
電氣ブラン咽から火が出る薩摩汁
霜の夜や菰着て路に寝た女
諸も食へず一日を寝る江戸子かな
ロハ臺にふんぞりかへつて月見かな
力こめて屁をひつて見る寒さかな
足少しはみ出して寒い布圍かな

煎餅布圍引張り合うて夜明けたり
木枯の夜をレール打つ音の徹しけり
へその孔ほぢくつて見る小春縁
土蜂の尻あぶりをる小春縁
小春屋根猫エロ振つて去りにけり
はらわたも伸びたやうなり小春縁
小春縁に脳味噌とけて寝たりけり

陽の光骨にしみこむ小春縁

小春の陽欠伸になつてしまひけり

ノツシくとゴム長靴の花見かな

雲の如き偉人の群れて花見かな

花よりも茶店の多き荒川土手

客よりも客引多き花見かな

土手に寝てパンかぢりつつ花見かな

汗くさき電車の窓や風薫る

すれ違ふ自動車と自動車や汗一斗

幸運の手紙ショーから来るや春の暮

フオードから幸運の手紙来て春の行く

赤電車欠伸をのせて走りけり

笑ひかけて欠伸となりぬ赤電車

肌ぬぎの客ばかりなり赤電車

糞蠅のうたゝ寝の鼻先徘徊す
糞つぼに似たる浮世の暑さかな
猛獸どもの吠え合ふ浮世の暑さかな
食ひかけて西瓜もてあます老夫婦
勿體ぶつた琵琶歌をきく暑さかな
奥利根や峰を隔てゝ雷鳴す
雷鳴や階下に女笑み崩る

谷川や崖に鮎つる小公望
鮎つりの釣なけて崖に晝寝かな
汐引くや峨眉山に月落ちかゝる(大毎に求められ
た室積海の二句)
行く秋や俊寛の遺跡語る僧
朝鮮見物
一日を食らはずに寝る暑さかな
瓜かぢりかぢりつかれて寝る子かな

暑き日や悠々とゆく鮮人帽

眞白な衣重ねて暑さかな

白衣重ねて汗ともならぬ暑さかな

夢うつつ朝鮮に入る夜長かな

皇居半ばこぼたれて京城の秋深き

秋風や物皆變りゆく京城

秋風や路に晝寢の朝鮮人

劇場に體操を見る夜長かな

帝展や繪になる女徘徊す

帝展を見合ひ女の散歩かな

柿喰ふや左手に紙の聯隊旗(明治神宮祭)

樽柿や一山十個二十錢

枝つきの蜜柑さげたり投島田

月姫もちとみそなはせ大神樂

神苑や砂利ふむ音の良寒き
霜にふむ曉の砂利のすがくし
御手洗の人に埋まるや明治節
賽錢の地に雨と降るや明治節
森の上に既に月あり晝花火
見る顔も馬鹿と見ゆべし馬鹿踊
五十二年屁の如く去る大晦日

ラヂオの落語きゝつゝ轉たねす大晦日
年賀状の後から死亡通知かな
除夜の鐘鳴るや貧乏神こそと行く
だまりこくつて飢しのぎゐる暑さかな
暑き日や腹すいて物云ふ力なき
空腹の蚊を逐ふ力なかりけり
氷食ふ話だけする長屋かな

切西瓜欲しさうに見る暑さかな
水食ふ人見て通る暑さかな
軒下に大の字になつて晝寝かな
飢えて泣く子等の泣聲暑いかな
六疊一間に十人寝てる暑さかな
この二日水ばかり飲む暑かな
鈴なりに蚊の食いついてゐる裸かな

犬と並んで地べたに晝寝の暑さかな
仕事にあぶれ夏の雨見て一日動かざり
帯しめ直して空腹を忍ぶ暑さかな
駄馬のキンから汗のしたゝる暑かな
汗臭き法被の並ぶ立見かな(宮戸座五句)
幕合を物賣る聲の暑いかな
三味の音のよごれて暑き芝居かな

せりふまでもきたなく暑し安芝居
肩ぎぬの光つて見ゆれ女文樂
營門や美人立ち居て風涼し
將軍の泰然として晝寝かな
大の字に我家關白の晝寝かな
敢然として本を枕の晝寝かな
ペンを握つて悠然として晝寝かな

全身融けて汗となるらん暑さかな
團扇太鼓の音の近づく暑さかな(小湊十句)
太平洋の波音きいて晝寝かな
二日月太平洋の片隅に
團扇太鼓に引かれて闇を寺に入る
磯の香や夜相模をとる漁夫の子等
朝霧や鯛見物の櫓のきしみ

鯛見物の人呼ぶ舟や霧の中
寺の屋根から鳩群れ立つや朝の霧
朝霧や立かけてもどる鳩の群
日蓮像の鼻筋白し鳩の糞
郵便にどなられて起きる晝寝かな
西瓜食つて腹鼓打つて笑ひけり
暑き日や命が汗になつてゆく

百姓の命の西瓜が二十銭
バナ、食つて飯よりうまいと思ひけり
八月の屋根の暑さやツエツベリン來
ツエツベリン來夏屋根に立つ民五百萬
秋鯖を嫁が食ふ世となりにけり
飛行機の見下ろす月の都かな
湯豆腐の咽にやけつく熱さかな

空腹のうなり物凄き寒さかな
空腹やワントンの笛遠寒き夜半
物干におしめならんで春の風
一寸までおらが帽子ぞ春の風
春の風チンドン屋の傘吹きまくる
うららかや女夫ちんどんや町に入る
パンくとお手鳴る方へ返え返る

若き尼の窓しめにけり猫の戀
猫の戀お巡りさんがにこくと
赤字風天下に吹いて梅雨に入る
滅棒の教員會議や初夏暑き
滅棒の宣告會や鰻飯
滅棒の小田原評議梅雨近き
煙突に轍つりたり駿河臺

五月雨や凱旋師圍京に入る
飲食兒童十五萬人梅雨に入る
梅雨五日ルンペン施飯に蘇る
梅雨十日命に徴が生へんとす
梅雨晴や去年の夏帽出して見る
青蟲のでつぶり肥えて梅雨長き
コレラ豫防の注射をするや梅雨寒き

梅干を食つてコレラこいと力みけり
長梅雨に苺腐つてしまひけり
梅雨晴や今宵の月のでかいこと
梅雨の日や新聞の碁を打つて見る
夏帽にかびこつてりと五月雨るる
梅雨の日や草履はいて蠅蝠傘もつて
單衣物に羽織引かけて五月雨るる

道ばたや土用鰻焼くに人だかり
梅雨晴やそれツと傘と命洗濯す
梅雨七日骨の中まで腐らんす
螢籠抱いてその儘寝たりけり
螢來い螢來いとて歸りけり
螢追ふてわざと近よる團扇同士
縁日や螢店かこむ人だかり

じつとして見てゐる夜店の螢かな
睡蓮の今年も咲かずしまひけり
全日本五右衛門になる暑さかな
汗たら〜蒸にまけてゐる暑さかな
死んだ石がひよこり生きて風涼し
西瓜切ろ西瓜切ろとて容をまつ
腹鼓打つて西瓜と比べけり

汗の塊の西瓜五錢で賣られけり
八つ切に斬つて五錢の西瓜かな
犬と併んでルンペン地面に晝寝かな
隣からジャズのラヂオの暑さかな
麥稈帽の虚無僧の來る都かな
廣告のない新聞ほしき暑さかな
廣告の一つなき茶店風涼し

不愉快な廣告ばかりの避暑地かな
納涼會や振袖藝妓の與太ダンス
納涼會ビールの廣告ばかりかな
ダンスならやれる納涼藝妓かな
夕涼し金魚買ひにゆく老夫婦
初こほろぎ今年の子金魚放つ夜
涼しさや一絲まとはぬ女モデル

水泳や馬鹿の三太がトップ切る
甚六が揃つて山に登りけり
空車通行すべからず銀座の夕涼
自動車衝突間髪を入れて汗一斗
夕涼み人と柳の銀座かな
ちつぽけな人間ばかりの婆婆暑き
喧嘩に負けた男大なり夕涼し

眞夏眞午鳩豆をまつ寺の屋根（目黒不動）
つゆ晴やお手植松の大手術
羅漢寺や羅漢の背に洩る晝の月
足もとから雲の峰立つ高尾山（高尾山に上る）
雲の峰貫いてケーブルカー上る
雲の上に尻こそばゆきケーブルカー
園子程に江の島霞む高尾山

かかむや眼下に關東十二州

雲の峰から眞逆様にケーブルカー

多摩御陵山は松風蟬の聲

郊外やおしめコスモス古國旗

安芝居 子供ばかりの暑さかな(小芝居)

物賣の聲暑くるしき幕間かな

低き山に碑の一つあり天覽山

なくもがなの茶屋三つあり天覽山

松茸や孫だきにゆく爺が顔

松茸や財布の銀貨讀んで見る

松茸そば今日より始め申候

女房見ろこの松茸のでかい傘

火鉢かこんで空腹聯盟のうなりかな

鯉こくの下痢となりたる寒さかな

薄寒き夕や豆腐屋の笛走る

獨り居の冷飯かぢる夜寒かな

元日やラヂオの鶯が鳴いてゐる（大阪から中継）

初鶯のラヂオ聴きつゝ雑煮かな

全日本ラヂオに初日のぼりけり（二見實況放送）

移り住みて門松たてぬこと十年

門松や形ばかり正月らしき家

頭から正月の來る娘かな

島田髻未だ成らず年明けんとす

除夜の鐘數へそこねて寝たりけり

除夜の鐘鳴り止まなくに寝たりけり

百八の鐘止みて煩惱まだ去らず

除夜の鐘五十四回を數へけり

元日や煩惱の鬼又戻り來る

元日から舞へもせぬ乞食獅子が来る
東京や隣から年賀のはがき来る
元日や雀に稗を撒いてやる
正月三日戸をしめて寝て本を読む
軒並に貸屋札はけて冬に入る
知らぬ町にふと友と遇ふ冬立つ日
チンドン屋黙つて行くや秋暮るゝ

紙芝居の太鼓淋しく秋暮るゝ

佐倉義民傳劇

雪の夜や法度の舟の綱を切る(一場)
留守の間に一村離散の話かな(二場)
雪の夜を父まつ土産話かな
去り状前にあかぬ夫婦の歎きかな
去り状焼いて奈落にいそぐ夫婦かな

江戸行きの袂はなさぬ子供かな
人動く度に雪降る芝居かな (三場)
そり橋に大名ならば紅葉かな
紅葉折れて訴状結ぶや手のふるへ
雷雨しきる夜を護摩の焰亂れけり (四場)
はりつけの話きく和尚の手まね哉
一切経裂いて行法呪ひけり



鬼火飛ぶ領地へ馬を驅りにけり (五場)
ぼんぶりに酒呼ぶ秋の廣間かな (六場)
銀煙管投げて大名獨り酌む廣間
大名の亡靈になやむ大廣間
鬼火追うて茶坊主に切つてかゝりけり

宮戸座忘年劇

幕合や鬼ごっこする土間の客

幕あげて客席見てゐる子役かな

忘年劇女子供客ばかりかな

子役見て棧敷の親が踊つてる

子役ばかり光る素人芝居かな

忘年芝居御臺樂屋を見て笑ふ

賈物の高島屋アと呶鳴る大向

忘年芝居鈴ヶ森に八木節交りけり

花咲いて紙屑上野となりにけり

花と人と紙屑と月の上野かな

ちる花にラツバ飲する母娘かな(小金井所見)

舞ひ狂ふ落花の中の喧嘩かな

小金井や長堤一里花が散る

小金井や水を隔てゝ喧嘩行く

水をはさんで喧嘩も花も流れゆく

聲かけて飛行機飛ぶ花の一里かな
花一里飛行機に人並行す

だまりこくつて一人花火を見てゐたり

水と陸と人一面の花火かな(兩國)

室一杯に晝寝してゐる獨者

パノラマの富士川下る納涼會

從妹その儘の舞姫のあり夏芝居

冷汗をにぎらせる納涼芝居かな
つかれた眼を生ぬるき風打つ電車

夕涼み五錢のシャボテンあさりけり

池にのぞむ立正大師像に風薫る(洗足池)

思はせぶりな夕立空鳴つて通りけり

命懸けで碁にまけてゐる暑さかな

空撃の眞似仰ぎゐる涼みかな

肝臓玉を煮え返させる藪蚊かな
蟲の聲とぎれて客の來りけり
獨居れば淋しかろとて蟲が鳴く
我が泣くに松蟲鈴蟲伴奏す
四隣りの時計別々に鳴る夜半の秋
五位鶯のたつた一聲に秋が立つ
此月に豈に鳴かざらんやと蟋蟀

燈を消して虫きく月夜かな
秋立つや白髪が馬鹿に目に立ちて
洗ひ髪隣からわが頬なぶる暑さ(電車)
池にうつるネオンサインの踊りかな
水を隔てゝ呼ぶ聲寒き夜更かな
貸ボートすらり並んで月寒き
月出んとしてほんのり白き蓮花かな

盛粧の扇子忘れた暑さかな
河豚食ふて死んだ角力のラヂオ哉
貸屋札のぞいて見たる月夜かな
稻刈るや百姓飢えて歌もなく
名月の夜を日本晴のラヂオかな
名月の夜をお産する女かな
名月や犬つれて散歩に出る男

名月の名所のラヂオきく六十州
名月の夜を通して踊りけり
まけさせて菊買つて歸る不快かな
體ぢうの血が沸きたぎる暑さかな
どてら着て眞夏坐禪の暑さかな
安芝居の相伴してる暑さかな
窓しめてトンネル通る暑さかな

濛々と油煙吸ふトンネルの暑さ
寝不足の眼に曉の風薫る
此暑い日を瀧癩玉が煮え返る
瀧癩玉にぎりつぶして涼みかな
名月を武蔵野に出て見たりけり
戸をさして名月の夜を籠りけり
月今宵物皆まどかなる思ひ

こほろぎの齊唱淋し午後の二時
さらでだに淋しきものを晝の蟲
名月や物干に出て栗を食ふ
名月や火事のポンプの走る音
名月の車窓にならぶ頭かな
名月や乞食なりやこそ夜もすがら
酒のまぬ我に秋刀魚あり今日の月

名月や下手な義太夫が通りゆく
名月や南京豆をかぢりつゝ
名月や自動車驅つて京を出る
名月の鐘つき忘れてぬたりけり
名月や喧嘩やめて酒をくむ男
名月に電氣ブランの氣焔かな
やり水を忘れて萩の花悲し

白萩や老未亡人の叔母が家
賣れ残りて花屋の萩のあはれなり
女郎花つんとしたるがわりなけれ
なよくと萩女郎花にからみけり
栗の茶屋松茸のちりも候ぞ
秋の雨桃山御陵靜なり
民の膏血物凄く映ゆ日光廟

家康の偽善燦たり日光廟
鉢植の紅葉に天下の秋を觀る
小春日や試験場の外は鬼ごっこ
義士祭や香煙の中の人の波
義士祭がデパート飾る末世かな
菊作りとなつて老將軍の名聞えけり
一坪計の雲西にあり秋の午後

碁にまけて五十年の秋願る
何處やらに釘打つ音す夕寒き
眞盛りの懸崖の菊何時か折られけり

友を訪ふ(十一月二十三日)

出迎へて枯芝に立てり老夫婦
枯芝を下りて友夫婦迎へに出る
落葉の門に夫人と友と犬が迎へる

落葉ふみ落葉ふみて友の門に入る
芝の上に秋の陽浴みて語り合ふ
家に入らず惜しみて晩秋の夕陽見る
枯芒の白きに見入りて暮れんとす
学校のやうな大門の標札や枯芒
三十年前をにこくと語る秋の暮
皺を見合ふて友と黙し笑む秋の暮

孫抱いてぞろくと送り出ぬ夕月夜
懐中電燈照らしつ落葉路送られぬ
送り來し夫人の聲願る月夜
元日や一年一度の客が来る
元日や死んだ子の年數へつゝ
思ひ出せぬ女名前の賀状かな
初湯出でのんびり爪つむ日向かな

松の内炬燵を買つて寝たりけり
長閑さや新聞のない一月二日
元日の新聞ナンセンスばかりかな
元日や何も見ることなき新聞
元日や與太ばかりの新聞紙
元日や同じ新聞二度も見る
髯でもそれと元日の妻の小言かな

郵便に呼起されて犬の春
寝過して雑煮は餅にかへりけり
床の中に賀状見てゐる犬の春
このあたり男ばかりや羽子の音
除夜の鐘にまさるラヂオの京訛(放送三句)
下駄の音の除夜の鐘にまさるラヂオ
京五寺の除夜の鐘ラヂオに遠近す

餅食つてく松の内寝つとけぬ

氷割れど金魚動かぬ寒さかな

近づけば乞食なりける臚かな

臚夜を知らぬ女の會釋かな

長閑さやゴム風松が飛んで来る

長閑さや山の眞晝の鋸の音

ぶらんこやモダンガールの脚太き

友を訪ふてあらず郊外の秋寒き

人間の多過ぎて郊外の秋淋し

地の上に人間餘りて秋の風

新宿や人地に溢れて風寒き

留守御殿半分しめて話初

傳書鳩の群舞ひもどるや初御空

土左衛門の檢視をするや春の月

落花集(自昭和三年
至五年四月)

遠足や握り飯に花ちりかゝる
春が来たぞとおれが鼻先花の散る
綿入の羽織ぬぐや花のさくあした
窓あけておやくと隣の花見かな

大自然の笑つてゐるや猫の戀
木魚のやうな春雨の音に夜があける
戀猫のうなりつづけて明けにけり
春なれやラヂオの聲に岡惚す
落選や春宵の屁に力なき
落選や淺春一夜屁もひらず
獨り子の亡靈つれて花見か

初雷の臍とらずして止みにけり
命がけの屋根から落ちぬ猫の戀
あられもない姫御前の脛や春の風
此暑い日を近所の赤ん坊合唱す
都かな四面おしめの古轍
生活のオーケストラをやる赤ん坊
赤ん坊人口政策を高唱す

萬物の靈長様の屁に秋の行く
武藏野や馬の屁に秋のたそがるる
體ぢうの汗みな出ると踊るかな
見てる中にいつか踊つてゐたりけり
コリヤさと鉢巻の坊主よく踊る
袈裟も衣も何のへちまと踊りけり
あけ放つ清凉殿の涼かな

東京灣の此涼風を一手かな
鉢の朝顔蕾のこらず抜かれけり
鉢植の朝顔一輪なればこそ
垣一面朝顔の花の榮華かな
あちら向いて朝顔の花さきにけり
朝顔一輪隣でふらり咲きにけり
夕立の聲だけかけて通りけり

寢られぬまゝに蚤と二人で月見かな
小春日や接吻をしてくれと云ふ鳩ぼつぼ
秋立つや隣の女房また生めり
からくりのよな隣の女房のお腹かな
秋行くやおかみの腹がべつそりと
秋は物の淋しきものよ古帽子
マント物云はず十有五年の別れかな

十五年着なれしマントの別れかな
ペンにおいて夜長の鐘を數へけり
雪の夜もだして二人橋をゆく
黙として吾によう似た海鼠かな
此冬は海鼠となつて炬燵かな
王侯もそどけ松茸のちりぢやぞよ
帝展は散歩によろし秋日和

雨の帝展ふらりふらりと散歩かな
腦味噌の煮えくり返る暑さかな
汗よりも體がとけて流れるぞ
隣から煤煙飛び來る暑さかな
煤煙の顔に飛び着く暑さかな
ペンもつた儘半日寝たる暑さかな
弟の夏帽貰ふ兄貴かな

二代の忠をぬきんづる夏帽子
十錢の郊外電車の涼みかな
西瓜食つて腹鼓打つ裸かな
目を閉ぢて蟲きく眞夏眞晝かな
うなるやうにお經きこえ來る暑さ
照り返へす屋根の暑さよ目がまふぞ
蟬鳴くや讀經の聲仄かなる

この暑さ逃げてしまへと讀經かな
松茸のちか今日は我家の關白ぞ
豆腐屋の親爺待て松茸を買つたぞよ
夜長の通夜腹の蟲も折々泣きにけり
時雨るるや大將の柩車門を出づ
大將の通夜をしぐれて逸話聞く
總理大臣の菊花に埋まる柩車かな

一黨の總裁埋む日を時雨る
香煙に頭痛する通夜の夜長かな
時雨る夜や亡き叔父の活動寫眞見る
土砂降り之夜の人影地に寒き
夜通しの白挽歌ひつかれたり
賽錢のちやらんことりと時雨れけり
此秋や秋刀魚味なく米安し

贈られし一箱の柿皆とろけたり
柿一箱贈られて妻の笑顔かな
生神様に先づ奉る柿二つ
飯よりも先づ柿を召す笑顔かな
御手洗みで水みづに飲む鳩の脊に落葉降る
雪降るや隣に酒を呼ぶ聲す
雪ちららく豆腐屋の聲往來す

犬牽けば犬の群れ来る夜寒かな
雪五寸足駄七たび迂りけり
娑婆に飽きて紅蘭買って歸りけり
鑿の音高らに鳴りて雪の降る
福引の樂隊樂やめて通りけり
プロ街や劍劇ごつこの子等寒き
汁とんで白粉はけし蜜柑かな

猿引の猿と路傍に蜜柑かな
食ふ程にむくほどに皮の蜜柑山
べそくべそかきながら蜜柑かな
一切空と思へども飯はうまいかな
手の皺なで、四十八年をかへり見る
おのづから老咳にきき入る置炬燵
三つばんが鳴る彌次の下駄の音木枯す

おぶられた赤坊もあたる朝焚火
すわ一大事背中を蚤めがかけ廻る
星一つ寝ぼけて落ちぬ霜の朝
ふんぞりかへつて自ら嘲ける炬燵かな
ペンもつてそのまゝ寝込む炬燵かな
焼く薯のほのかにほふ炬燵かな
憤然として炬燵から出てペンを執る

煮え豆腐悠然としてのんど下るかな
誰か来たよな音がして雪くづる
大聲門を叩いて雪の夜を友來る
外してはかけく夜長の檢温器
一人居の屁を友として冬籠
かへり見るおらが五十年屁に似たり
すりや一大事片手袋を鼠引く

支那行

蕪くさき支那町出で、風薫る
鼻をつまんで支那町出るや夕暑き
鼻をつまんで夜店をあさる涼みかな
蕪くさき支那町の土の暑さかな
蕪くさき浴衣にすれ合ふ小路かな
蕪くさき風の暑さよ支那の町

蕪くさき笑の暑き麻かな
昨日から体も汗も蕪くさき
路ばたや瓜を喰ふ人ひさぐ人
暑さ日や犬とならんで路に寝る
一望千里高粱畑豆畑
高粱と月ばかりなり大満洲
羽織着て水泳にゆく露西亞美人（ハルビン）

貧乏神早く出てゆけ除夜の鐘なるぞ

福引番の鼻垂娘寒けなる

福引に馬穴引いたり大晦日

家出の従妹つれて歸るや大晦日

家出の従妹寒さうに歸る大晦日

半疊や幕明かんとして耳聾す(明治座)

幕合ひやひそまりかへる大向

芝居酣にして泣く赤子かな

つまみ出せと泣く子を嗷鳴る芝居かな

嗷鳴り合ふて幕間賑ふ芝居かな

幕明くや獅子吼ゆる如き大向

大向嗷鳴り合ふて喧嘩の芝居かな

涼しさや斬りも斬つたり十五人(撥分け小平)

豆のやうな男男達を呼ぶ暑さ



龜山の仇討日本晴の暑さ（龜山仇討）

仇討を忘れる戀の暑さかな

涼しさや返り討たるる水右衛門

水右衛門食はされて涼しく討たれけり

76

大衆の喜ぶ芝居の暑さかな（奥州膝栗毛を嘲る）

夜暑し大歌舞伎座に見る仁和賀

薄つべらな領主なりけり娑婆暑き（領主と樵夫）

初 氷 集（自明治三十三年
至昭和二年頃）

初鴉神泉苑の彼方より

初鴉八百八町明けんとす

初鴉打込む神鼓第一聲

初鴉富士の一角ほの白き
大いなる羽子板だいていね給ふ
窓あけて羽子の戯れみそなはす
元日や老いたる妻の美しき
一門を集めて屠蘇の機嫌かな
元日の港に入るや蜜柑船
入海や軍艦ならぶ初日の出

屠蘇に酔うて猿引猿に引かれけり
輪飾や水手洗の大蛇水はかず
輪飾の小さきがかかる仁王かな
輪飾の取り残されし貸屋かな
輪飾の揃ふて太し遊女町
一村の娘鞠つく學校かな
梅の花散れよとばかり謠かな

友訪へは梅の空家と變りけり
梅一枝咲かぬを生けし翁かな
梅の鉢日向に蕾數へけり
我が植えし梅に名を得し詞かな
鶯や調見賜ふ大廣間
丑紅やうしと見し人美しき
出代つて巡査の妻となりけり

ブクリくと瓦斯の泡出て水温む
春風や掛物ゆらぐ大廣間
春風や一列長き女學生
切れ風の虹に觸れたる光かな
大風の聲靜まりて降りけり
春の夜を犬も喰はざる喧嘩かな
試みに死んでも見たや春の宵

春の夜や煎じ薬の沸える音
公達の烏帽子忘れて春の宵
寄せ鍋に顔のぞけたり春の月
湖みちて島影淡し春の月
朧月三味の主じは男かな
鍋さけて引越するや朧月
口あけて淡雪なめし蛭かな

春雨や傘一本の駄菓子店
こぼち居る壁の匂や春の雨
畑打つやスポンを穿いた豫備士官
箱庭や土筆ん坊主屹立す
大佛の眼たゝきもせぬ日永かな
病室のみな首だして日永かな
見せ物の虎のゐねむる日永かな

摘草のつい鬼ゴツコとなりけり
戀猫の睨み合ひけり鬼瓦
花一山紫の暮うたせけり
欠伸して見送る雁の別れかな
二階から見送る雁の別れかな
舞ふ花の行衛見てゐる車掌かな
龍頭の蛇尾となりたる花見かな

貝殻のきら／＼として春の川
摘草の歸りは言問團子かな
乗換や蛇の目數ふる春の雨
加茂川や友禪さらす春の雨
春の雨後に乗つて歌下る
春雨や風癩院のしんとして
春の雨垣を隔てゝ話かな

初戀の女物言はず春の雨
老人の惚氣さく夜や春の雨
鐘の音の雨より細し春の夜
春の風裾をつまんで走りけり
狂乱の蹴出し現はに春の風
見世物の虎嘯くや春の風
徒らに狂女笑ふて春の風

春の風馬の尻尾に狂ひけり
洗ひ髪吹くに任せて春の風
肴屋や向鉢巻春の風
狎だいて佇む門の日永かな
狎などをなぶつておはす日永かな
朧月キャラメル食ひつ散歩かな
朧月河岸の向はしんとして

朧夜や廓歸りの人に遇ふ
月朧笑つて見たき夜なりけり
月朧吾が名を呼びし人や誰れ
春なれや忘れし人も思はるゝ
親猫の我子を戀ふる勢まほかな
戀猫の垣を隔てゝうなるかな
何處やらで猫の戀する願ねがひかな

路間へば廓なまりや朧月
初午の裏は艶なる町にして
つばくらや一直線に色町を
春の夜を石ければ石の光りけり
春の水眞白な石の光りけり
永き日や石切る山の音遠き
戀猫の人を恐れぬ日向かな

睨み合うて戀ともならぬ小猫かな

吾が家の廳に見ゆる月夜かな

永き日や隣りの鶉鳩よく語る

藤月横町にそれた頬冠

白魚の頭残しておはしまます

春は物の人の頭も光るかな

耕すや豆人寸馬かけらふて

耕すや大いなる日を背に負ふて

藤咲いて主は美人でありさうな

噴水の届かんとして藤の花

傘を斜に若葉くゞりけり

葉櫻や大佛暗き晝の雨

塔高し若葉の上の二日月

蚊帳つりて人形寝せてゐる子かな

嫁が来て新しき蚊帳つらせけり
ほろ酔の小唄とぎるゝ蚊帳かな
蚊柱や裸のやうな人の影
五月雨れてつくゞ木魚聴く夜かな
五月雨や築地崩れて栗の花
つきかけて時鳥きく鐘樓かな
青鷺の行衛見送る二階かな

衣更へて夜店あさりにゆく夫婦
桐の花夕日に富士を見つけたり
鐘の音に角收めけり蝸牛
乗かへて人なき電車風薫る
短夜を其儘寝たる草鞋かな
短夜の星明け残る湖上かな
青嵐千石船に帆をあけて

湯上りの合せ鏡やつり惹

繪日傘の川渡りゆく夕日かな

水ちよろく蝙蝠低き土橋かな

蝙蝠や三日月落つる塔の尖

啞蟬の従容として鶏に食はれけり

岩清水羽蟻の下る聲かそか

裊や斜にさした漣團扇

叩かれて戀となりたる團扇かな

丘の上の勢を視よ初幟

風鈴の鳴らんとしては止みにけり

行々子論する國の境かな

大江戸の中空に飛ぶ螢かな

心太沈みもあへぬ清水かな

姫御前の鬼に背負はれて富士詣

蚊柱や開け放ちたる冠木門
汗たらしく村長殿が碁にまけて
さめんとして遂に半日晝寝かな
小男の大きくなつて晝寝かな
夕立や都大路の人騒ぎ
夕立や駄馬が糞する渡し舟
朝顔や厚化粧する小傾城

霧はれて見上ぐる山の小寺かな
城見えて水見えて霧立つ夕べかな
稻妻に見つけだしたる案山子かな
繪のやうな霧の中行く電車かな
古琴を取りいだしけり萩の雨
油繪をかけたる窓や白芙蓉
葡萄つむ美人そむきし夕日かな

板塀の夕日に赤き柘榴かな
亡き人の肖像ふりて蘭の花
雨はれて駕籠に月見る山路かな
名月の散歩がてらの巡査かな
こほろぎや三味とりいだす圍る者
亡き人を思ひ出したる砧かな
佐渡やかなた鯨子を呼ぶ星月夜

頬かむりとらせて見たき踊かな
傾城の合せ鏡や秋海棠
海苔焼いて兵を談ずる野營かな
終列車乗り後れたる夜寒かな
良寒の欠伸をのせて電車かな
夜寒さの古本店をあさりけり
鬪引く小舟くの夕日かな

山雀やしんかんとして雨の寺

箱根から修善寺

停電車人居ねむつて秋暑し

稻刈るや石橋山を背にして

吾が父に似たるどてらの案山子かな

橋欄や布圍干したる温泉道

朝寒の谷にとどろくくさめかな

眼に見えぬ鳥飛ぶ聲す秋の空

良寒の温泉の宿や人戀し

雲悠々眼下山紅葉して

見かへれば紅葉の茶屋は雲にあり

雲割れて紅葉ほの見ゆ谷の底

雲静に流れて紅葉もえんとす

白雲の間に間にもゆる紅葉かな

白雲や瀧は紅葉にせかれつゝ
満山の紅葉ちれよとくさめかな
白旗の行列長き紅葉かな
九天に沖する谷の紅葉かな
洋装は赤い傘して紅葉かな
紅葉折るべからず瀧へ五六町
山腹は雲の帯して紅葉かな

雲の帯絶えて紅葉のもゆる哉
地獄谷から極樂へつゞく紅葉哉
一山の紅葉のもえて雲を吐く
紅葉かな只紅葉かな夕かな
駕籠かきの紅葉見よとて煙草かな
駕籠かきは雲の上行く紅葉かな
駕籠とめて暫く紅葉みそなはず

自動車の雲に入りける紅葉かな
凝じ乎つとして秋の雨きく温い泉いかな
温い泉いをいでゝ良寒の身の慄おそえかな
番頭の類の瘰うや良寒し
良寒の心中話かきく夜かな
虎御前曾我兄弟の墓薄かな
寒さうに賽の河原の大地藏

郵便の傘さして行く薄かな
電柱の三尺高き薄かな
兵を呼ぶ喇叭や秋の行かんとす
秋風に追はれて箱根下りけり
胡麻の灰の出さうな頃や秋の風
富士の雪手にとれさうな薄かな
雪の富士見ゆると叫ぶ薄かな

川に沸く温泉を出る人や朝寒し(修善寺)

月も泣け松も夜を泣く暮の秋(夜泣松)

朝寒のこだまに返す喇叭かな

朝寒の温泉に入れば五體蘇る

片時雨の臥牛山月の小松原(沼津)

行く秋を渡鳥の羽薄光る

客去りて火鉢一つの廣間かな

一角は猫を入れたる炬燵かな

炬燵から猫の這出る欠伸かな

稚兒鬢の睨み合する炬燵かな

手洗へば雁の行くらし初氷

残月の落ちて結ぶや初氷

垣越しに葱も霰も貰ひけり

鷹狩の行列長く時雨れけり

釣り上げし河豚のふくれて時雨れけり
兵營の半ば時雨るゝ月夜かな
湯歸りの結立鬘を時雨れけり
燒跡の壁こぼち居る時雨かな
葬禮の人足いそぐ時雨かな
寄鍋の音ぢりくゝと時雨れけり
水涸れの枕にかたよる落葉かな

猿引の猿に教ふる榾火かな
老僧の失戀語る榾火かな
雪とつて藥のんだる苦味かな
大雪や開け放ちたる營所門
賣卜の眞赤な嘘を吹雪かな
餅搗や女ばかりの姦しき

生きる爲の文藝

一 誤解された文藝

ベネットの「文藝趣味」の冒頭に、こんなことがある。——「大抵の人、でなくとも、多数の人は、文藝趣味を一種の上品なたしなみだと思ひ、それによつて自己を完成し、自分を正しき社會の一員として適切ならしむることが出来る」と考へてゐる。彼等は上流の宴席に於ける禮儀を解せざることを恥ぢ、忽然乘馬に誘はれて、能はざるに赤面すると同じ様に、文學に不案内なることを密に恥ぢてゐる。世には知らねばならぬ物事があるが、文藝は正に其一つであるといふのが彼等の考である。彼等は有ゆる場合に禮儀正しく自ら装ひ、禮儀正しかるべき舉動を學び來つた。彼等はまた今日の諸問題に對して相當に興味をもち、勤勉と冒險とによりて、其職業に於ても成功しつゝある。されば文藝趣味は、自尊心ある人間の本當に手放すべからざる手荷物であることを忘れてはならぬ。繪畫はそれほど重要なものではない、音樂もまた甚だ重要とは限らぬ。けれども、何人も文藝に關しては知るべきである。文藝は實に魅力ある慰藉である。文藝趣味は二重の役をなすものである。一に正しき教化の證明書として更に又個人的の娛樂として役立つものだ。彼等は考へてゐるのである。嘗て數學に通じ、勝負事に巧であり、ヴァイオリンに堪能な、ある數學家が、書籍に關す

る話に耳を寄せた後で私にいつたことがある「さうだ、私は文藝に手をつけなければならぬ」と、それは恰も、私はうっかり文藝を忘れてゐた。他の方面には既に一通り通曉したから、今こそ文藝を手に入れなければならぬとでもいつてゐる風であつた」と――

私は此文を読んだ時に、英國人と日本人との頭の差異について考へねばならなかつた。何れの道に於ても、日本人が尊敬してゐるほど、必ずしもゑらくない英國人ではあるが、日本人の中に文藝に關して、せめて斯うした英人のやうな考をもつたものが一體どれほどあるであらうか。いや斯うした考へ方すらが、後に説くほど決して貴いものではないのである。が、日本人の中に、文藝を禮儀作法ほどにまで考へ、若しくは文藝に通ずることによつて、正しい社會に仲間入りをなし、上品な人間になれると思つてゐるものすらがどれだけあるであらうか。まして文藝を以て、人間の知らざるべからざるものゝ一つとなし、自尊心ある人間の放手すことの出来ない個人的な手荷物だとしてゐるものを、所謂識者の間に幾人數へ得るであらう。萬人が萬人、凡てが文藝について充分承知すべきであり、文藝を繪畫よりも音楽よりも重要なものとなし、有ゆる藝能に通じた後には必ず文藝に通じなければならぬとなすものが、日本人中に果して何人あると確言出来るであらうか。

日本人は皆詩人である、日本人は皆俳句を作る、日本の婦人は皆歌人である。日本の婦人は皆歌をつくる、といふことは、外國人の書いたものを讀むと目につくこと屢々である。

ところが日本には、古來詩を作るより田を作れと云ひ古された諺がある。或は文學をやつて三文

にでもなるかといふ言葉をよく耳にする。或はまた嫁入りすると、詩歌どころか雑誌を讀む時間もなくなるといつて、折角歌をやつてゐた若き女達も、皆といつていゝほど、大抵、歌も俳句もやめてしまふのが通例である。文藝の路に足をふみ入れたものは、或は文學青年だといつて、多くは身を誤り家を亡ぼす位に考へられてゐる。小説などを讀むことを禁じてゐる家庭や學校などは、まだざらにあるやうである。大臣大將にして本の一冊書けないものが少くないのはまだしも、生れて芝居を一度も見たことのないといふ大臣大將が決して少くない。そしてそれが日本國の中心勢力をなす人々のことである。文藝に對して興味をもつ所か、文藝は呪ふべきもの、文藝は害あつて益なきものと考へてゐる人の方がまだ多いと説くことが當らないとすれば、まださう考へてゐる人が存外多數であるといふことは明言出来ることである。そしてこれらの人々が、まだ世の中を支配してゐる時代である。文藝を以て人間が知らねばならぬものと考へ、人間に磨きをかけるに無くてならぬ嗜みと考へるまでにさへ、まだくゝ日本人の多くは可成な距離があるのである。つまり多くの人は文藝といふものを誤解してゐるのである。むしろ文藝が何であり、如何なるものであり、如何なる作用をなすものであるかと理解されてゐないのである。

二 文藝とは何か

それでは文藝とは何かといふと、之に對してこれまで與へられた定義は随分澤山ある。或は之を

廣義に解して、只讀んで面白く書かれたものといふ定義を與へたものもあるが、面白いといふのも、人によりて異り、時代によりて異り、頭の程度によりて異つてゐる。或は想像感情及び趣味を通して、一般の人に分易く面白く讀めるやうに、思想を書き表はしたものと説く者もあるが、此の説にも明瞭でない所がある。或は文學とは、反省するといふよりも想像することから成つたもので、多數の國民を教化するよりも樂ましめることを目的とし、特殊な知識をもつてゐなければならぬといふよりも、一般に容易に理解されるものと説くものがあるが、實際には、想像以外に反省したり考へたりする部分も多分にはいつてをり、快樂と共に教化を存外大きな仕事としてゐることがある。そこで又、文學といへば、之を取扱つた題材も、その取扱ひ方も、一般の人の興味をひき、形式も大切であり、その形式から生まれる快樂も重んぜられた書物から成つてゐると説くものもある。或は單に吾々の思想感情を言語で表はした作物だと説くものもある。何れも長所と短所とを有し、十分に云ひ盡されてゐないやうであるが、要するに、廣く何人にも關係があり、永久的に興味を感じしめる様々の人生の姿について、考へたり感じたりした事を面白く記述したものが文藝で、言語を通じて人間の生命の姿を現はしたものである。

かういつたのでは、如何にも抽象的に過ぎるかも知れない。何とかして今少し之を具象的に分り易く説明しなければならぬ。けれどもそれは非常に困難なことである。が私は試に一例を取つて見よう。——ある時二匹の蛙が戦つてゐた。その一匹は他よりも瘦せて、動もすればその方が戦さに

負けようとする風である。丁度其時、居合せて蛙の合戦を見てゐた老ぼれ坊主は、瘦蛙、負けるな、く、さ、やれ、しつかりせい、やれく……と盛に瘦蛙に勢援してゐた。坊主は俳諧師一茶であつた。「瘦蛙負けるな一茶此處にあり」と歌つた。丁度その側にゐた他の一人は、可笑しな坊主だなど思ひながら、ぼんやりと見てゐた。數日の後に、その男は犬の喧嘩を見つけた。そして他の人々は皆強い犬の方に加勢してゐたが、前に蛙の戦を見てゐた男は、此時一茶の瘦蛙に加勢した理由が始めて分つて、ひよろくになつて、負けようとする老犬に何となく勢援しないではゐられないやうな氣持になつた。可愛想だ、氣の毒だ、あの老犬は今にも若い猛犬に噛み殺されてしまふだらう、さう思つてしつくと老犬に加勢せずにはゐられなくなつた。そして今こそ一茶の俳句の心持がしみくと感じられたのである。此處である。彼は此の時立派に文藝の境地に立つたのである。何故であらうか。

最初一茶が蛙の合戦を見出した時に方りて、彼は其所に自然の姿、自然の美を見たのである。強者と弱者との戦、生けるものゝ優越を得んとする熱情、弱き者も尙負けざらんとする情熱、此等の兩蛙の合戦の間に流れてゐる情熱の美を發見すると同時に、自然の因果として、亡びゆく弱きものに對しては、美しい同情の念をそゝがないではゐられなかつたのは一茶である。自然美の發見と、同情美の湧出！因果律の理解、それは一茶のことであつたが、犬の喧嘩を見出した人も、見て居る中に又熱情の美を發見し、之に對して同情美をそゝぎかけないではゐられなかつたのである。

此等の美の發見、同情美の湧出は、やがて之を他人に物語るか、之を書くかしないではゐられないほどの衝動を感じしめ、情熱を湧かしめるのが常である。かくして言語となり文章として現はれたものが即ち文學である、文藝である。蛙合戦を見てゐた一茶も、他の一人の男も、自然界の美を發見して文藝を作つたのである。

三 文藝は眼を開ける

吾々が自然界に於て様々な現象を目撃し、人生に於て色々な世相に接觸する時に、目をあけてゐると、様々な美を發見するのである。靜なる美、活動的の美、喜の美、悲の美、戰の美、平和の美、吾々の眼は本當に物を見るのが出来るのである。此等の様々な美を發見した時に、吾々の耳が眞に物を聞く事が出来るのである。ぼんやり見てゐたのでは、少しも美しいと思はない所に、眞の眼が開かれると、何故に今迄此美に氣付かなかつたらうかと自ら怪むほどの不思議な美が見出されるのである。只ぼかんとしてゐたのでは、少しも聴えなかつた所に、驚くほど美しい音が聴えて來るのである。かうして眼が開き耳があいて來ると、常人の眼に見えないものが美しく見え、聴えないものが美しく聴えて來るのである。すると吾々は眼によりて耳によりて新に發見した美を、その儘獨りで密にしまつておくことは出来なくなるのである。文章に綴るか、他人に物語るか、吾々の本能は誰かに之を傳へたり洩らしたりしないではゐられなくなるのである。他人に之を傳へたり洩らし

たりして、他人の眼をさまし、耳を開けてやらないではゐられなくなるのである。即ち自分から自然の美人生の美によりて眼を覺まされたものは、更に他人の眼をさまし本當に物を見得るやうにしてやらなくてはゐられなくなるのである。かくして吾々は詩をつくり歌をつくり小説を書き劇を作るのである。そして之に接し之を読むものゝ心を動かし眼を開かしめるのである。此意味からいふと、文藝は實に吾々に内觀の眼をあけてくれる所のものであり、耳を開いてくれる所のものである。いな文藝は生命の姿を見せ、眞に生くるの道を教へてくれるものである。

ベネットは即ちいつてゐる。——「文藝の作者は宇宙間の新しい興味を發見したり感じたりした人々である。そして文藝の最も偉大なる作家は、其視感が最も廣かつた人であり其感情が最も強烈であつた人である。常人の内觀が断片的であり、恐らく一時的であつたに反して、偉大なる作家の生活は徹頭徹尾永い恍惚の世界であつたのである。常人にあつては世界が倦怠の繼續であつたに反して、彼等にあつては陶醉の繼續であつたのである。人生が下らない倦怠に満ちたものでなくして、見るもの聴くもの恍惚と陶醉を感じしむるものであることを知ることが、何の價もなく、何の意義もなく、何の興味もないことであらうか。トンネルを出でて山腹に導かれ、麻痺せんとした感覺に刺戟を與へられ、人生の眞の香味によりて強められ、心臓の元氣ある躍動を感じしめられることが何でもないことであらうか。此等の心臓の躍動を感じ、喜と美とに恍惚とした文藝の作家は、文藝の讀者をして、自分と同様なものたらしめようとしてゐるのである」と。

四 文藝は眞に生きるに必要

して見ると、文藝を有害なものを見るとか、何の役にも立たないものと見るとか、詩を作るより田を作れなどいふことが、頭から間違つた考であることは、誰にも自ら肯かれる筈である。かういふ見方をする人は、文藝の弱點のみを見るか、文藝を誤解するか、妄用された文藝の弊害のみを見たいものゝことである。文藝といふものは、決してそんな有害無益なものではなく、人間が眞に生きる上に、寧ろ必要欠くべからざるものである。

ベネットは即ち、英國一般人のやうな態度や、之に類した考へ方さへが間違つてゐるといつて述べていふ。——「文藝が如何なるものであるかを眞に理解し、文藝の作用が如何なるものであるかを理解するものに對しては、多數の英人の抱いてゐる態度は只笑ふべきものである。そして文藝趣味を養はんとする人にとりては、それは寧ろ致命的なものである。文藝趣味を單に一個の嗜みと考へ、單なる慰みとして之を養はんとするのは、此嗜みの獲得に成功し得ないのみか、慰みとしても十分に之を使用することの出来ぬ人々である。そのくせ文藝は慰藉としては最も完全なものであり、嗜みとしても之に優るものなく、殊に有ふれた俗っぽい頭に對して、上品と力との印象を與へるには比類なきものではあるが。」

「要するに文藝は吾々が完全な生活をしようとするに方りて、根本的に必要欠くべからざるもので

あつて、決して添へ物でも附屬品でもないのである。私は決して誇張しようとするのではないが、文藝の自由な世界に導き入れられないものは、睡眠の世界から覺めないものだといつても差支なからうと思ふ。彼はまだ此世に生れてゐないのである。生れてゐてもまだ本當に物を見る事が出来ないのである。眞に物を聴くことが出来ないのである。いまだ完全な意味に於て感ずることが出来ないのである。彼は只食ふことだけが出来るのである。だから眞に文藝の作用を解し、それによりて利益を得來つた人々に對して、此上もなく有害なものは、ろく／＼生きてゐないくせに、自ら生きてゐるといふ謬見の下に、うろ／＼してゐる非常に澤山の人々である」と。

然り、正にその通りである。實際に於て文藝が何であるか、如何に人生に尊く飲くべからざるものであるかを眞に理解することなくして、文藝の効果を云々し、氣の毒な未誕生の人間であるに係らず、何もかもを解してゐるやうな顔をして、吾こそ立派に物が分つてゐるといふやうな、恣らぶつた物云ひをする人間ほど、人類文化の進展に邪魔になるものはないのである。彼等にありては、形に見えるものより外には何も見えないのである。隠れてゐる美しさや尊さの如きは何も見る力はないのである。形しか見えないからには、文藝の妄用に現はれた結果のみを見て、文藝の作用や意義や効果を論じようとするのである。さういふ人には人生の貴い美を發見する力もなければ、人生の眞意義を理解する能力もないのである。金の力を以て最も尊いものであるとして、その爲し得る力のみを見ることが出来、その力を標準として、眼に見える世界のみを十呂盤の上に勘定しよう

とする人である。人間の貴さや、ゑらさをさへ、給料の多寡や、富の多少や、地位の高低によりて計らうとする人である。本當の人間のゑらさは、さういふものゝ外に隠れてゐることが見えないのである。服装の美しさや、金筋の多少によりて、軍人の階級を計らうとする子供と少しも異なるのである。かういふ人こそは人生に於て最も氣の毒な人であり、最も浅ましい人であり、文化の進歩の上には害はあつても益はないのである。文藝はさういふ人にこそ最も必要なのである。かういふ人々を眞に眼の見えるやうに導かうとすることが、實は本當に文藝の仕事であるといつてゐるのである。

五 文藝は生活の手段

されば文藝は、各人の慰みとして身だしみとして必要である以上に、吾々が本當に生きようとし、本當に生き甲斐ある生活を生きようとするに方りて、さういふ生活に自らを導き入れる爲に、なくてはならない、必要なものであるのである。此意味に於て吾々は文藝を研究し、文藝趣味を養ひ、文藝といふものを知らねばならぬのである。

ベネットは即ち文藝趣味養成の目的についていつてゐる。「文藝研究の目的は、只暇な時間を慰むといふことではないのである。自らの目を覺まし、自ら生きることである。快樂に對し、同情力に對し、包容力に對しての能力を強め、資格を豊にすることである。而も單に一時をそれに影響さ

せるのでなくて、二十四時間を影響させることである。自分と世界との關係を全く變へてしまふことである。文藝の理解ある翫賞といふことは、一切世界を理解し翫賞することであり、その外の何物でもないのである。ばら／＼になり、孤立した人生の部分でなくして、相關せる人生の全部を一緒にして、一個の地圖の中に組合せることである。文藝の精神は統一することである。蠟燭と星とを關聯せしめ、想像力といふ魔術によりて、より大なるものゝ美はまた、より小なるものにも存することを示すにあるのである。そして文藝は美を發見して、その美の焦點に凡てのものを寄せ集めることに満足せず、到る處に原因結果の跡を辿りて、重要な知識を積ましめるのである。文藝は即ち一面には思ひもよらぬ愛らしさ美しさを發見し、一面にはまた吾等の運命が、結局何人も避けがたき共通の運命であるといふ因果的の證據を示して、二重の慰藉をするのである。……要するに文藝は生活の手段であつて、文藝趣味を養成しようとすることは、此生活の手段を如何にしたならば最もよく用ふべきかを學ぶことであるのである。だから生きることが望まないものだとか、物事に對して強烈な感じを受けるよりも、むしろ感情の刺戟を避けたいと思ふやうな人ならば、文藝に對して背を向けた方が善い筈である……」と。

成るほど昔の文藝には、只空想と架空から出來たものが多かつたことは事實である。けれども新時代の文藝は決して出鱈目なものでもなければ、徒らに机の上で作りあげられたものではないのである。作者が人生の様々な事象を觀察し、自然の間に探求して、其處に發見した眞實と美とを想像

力を通して描き出したものである。そしてその間には味ふに足るべき、貴くやさしい感情美もあれば、翫味すべき因果の理もあり、盛衰興亡の相も含まれてゐるのであつて、謙讓な頭を以て之に接すれば、最善の生活を生きる爲には、如何にせば最も適切であるかを、其處に立派に見出し得るのである。成るほど發育不十分なる頭を以て之に接すると、其處に描き出された作品の本旨をつかみ得ないで、誤解したり妄信したりして、不孝な結果を招くに至ることが間々ないとは限らないが、それは蓋し例外であり、之に接するものゝ方に悪い處があるのであつて、文藝そのもの、殊に立派な古典文藝には、さういふ罪を歸すべき理由は少しもないのである。従つて文藝の一面の弊害のみを見て、文藝を有害なものとなしたり、若しくは無價値なものとなすが如きは、愚も亦及ぶべからざるものであると立派にいへるのである。いな今一步を進めて、文藝趣味のないものは、眞に生くべき道を解し得ざるものであり、文藝の何たるを解せざるものゝ如きは、人生の一面のみしか見得ない人であり、立派に人生に處する力のない人であり、生き甲斐ある生活を送ることの出来ない人であるといつて差支ないのである。されば英國などでは、凡ての人間に文藝趣味をつぎ込まうとして中等以下の一般學生に對しても、大眞面目になつてシエクスピアを教へ込まうとしてゐるのである。

六 殊に女子に必要

文藝趣味は一般の人に必要である。男子にも必要であり、女子にも必要である、が女子にとつて

は此趣味が殊に必要である、と私は敢ていふ。一家の内政の主宰者として、母として子を教育する上に於て、妻として夫の同伴者たる上に於て、文藝趣味が必要であるのみでなく、人として社會的に活動して行く上に於ても常に必要であるのである。成程衣服、調度、料理、洗濯、經濟等の目に見える有ゆる家事、家政を處理するには、相當な科學的知識や諸種の常識が必要ではあるだらう。その上に儀禮とか音楽とか美術などの嗜み飾りなどがあつたら、大抵は十分といつていゝかも知れぬ。けれども文藝趣味の缺けたものが、人生を深く觀察し、理解しするは別としても、色々な事件に出遇つて、夫に代つて、よく適當な處理を行ひ、夫の同伴者としての務を十分に果せるであらうか。淺薄な人生觀の持主であるはまだしも、人生觀照の眼さへろく／＼働かし得ないものが、よくこれからの男性の相談相手として立つてゆくことが出来るであらうか。學校時代に於ける教育の受賣り丈で、夫を助けて眞に生きるの價ある生活を送ることが出来るであらうか。私は其處に非常に大きな疑問が起らないではゐないのである。

更に文藝を解することが出来ず、人生を十分觀照することの出来ない女子が、母として立派に子供を育て、行くことがどうして出来るであらうか。本能の愛のみによりて、どうかかうか子供を教育し得るのは、幼稚園時代位のみである。否人生觀照の貧弱な頭を以てしては、それさへろくに出來ないで、飛んでもない誤つた教育をしがちである。やがて小學時代となり、中等學校も終へる頃になると、子供はもう時代遅れの、貧弱な人生觀に立つた母の言になど耳を寄せなくなるのであ

る。親の言に耳を寄せてゐると思つてゐる間に、その實は耳を寄せてゐるが如く見せてゐるに過ぎない場合が屢あるのである。その結果は親の後悔のみではすまないのである。子はもう取返しがつかない、誤つた道に踏み込んでゐることが屢々あるのである。進んだ常識の持主であると同時に、適切な人生觀時代觀をもつてゐることは、母として子を教へてゆく上に最も必要なことである。そして此等をもつが爲には、廣義の文藝によるのが、一般的には最良の方法である。文藝は人生を觀、自然を知り、時代を見るの眼をあけてくれるものであるからである。

これまでの女性は、簡単な頭の持主であつて、どうにか事が足りた。それは只家にばかり引込んでゐて、どうにか子供を大きくして行けば、そして妻として主婦として、一通りの事をしてゆけば、それで一人前として通用した時代であつたからであつた。だから此れ迄の女性同士の話といへば、着物の流行とか、髪物の流行とか、買物の上手下手だとか、交友の家庭の批評とか、女中を材料としての雑談とか、亭主の自慢話とか、家計のやりくりとか、有りふれた世間話などが主であつた。つまりこれまでの女性は、さうした事へのみ關心をもつてゐるだけで澤山であつた。處がそんなことに關心をもつてゐたのでは、もう新時代の女性たるには足らぬものとなつてしまつた。新時代の女性は先づ自分を一人前の人間に仕上げなければならなくなつた。これまでのやうなことに關心をもつたわけでは、もう本當に生きた人間とはいへなくなつた。本當に生きた人間として生活するには、日常の新聞紙上に現はれる様々の問題、政治上、法律上、經濟上、外交上、教育上、科學上、思想上の

事に大体に通ずる勿論、殊に女性に關係多い思想上教育上の問題には、十分に注意すると同時に、適當な判断を下し得る一人前の人とならなければならなくなつたのである。それが出来ないやうでは、最早これからの子供を、立派な一人前の人として教育してゆくに足る資格がなくなつたからである。つまり世の中が複雑になつて、世界的になつて、暮らしにくくなつたので、これまでのやうな家庭教育だけでは、子供を立派に育て上げることが出来なくなつたので、母としての本當の務は、非常に六ヶ敷なつて來たのである。

本當に自分の子を立派に育て、新時代に適切な、時勢に役に立つやうにしてゆかうとするには、これからの母親となる女性は先づ眼があいてゐなければならなくなつた。肉眼に見える方面だけ知つてゐたのでは足りなくなつた。家庭の主婦として忙しい様々の仕事をする上に、たへず自分の頭を進め、眼に見えない世界にも、常に心を注いでゐなければならなくなつた。眼に見える方面に心をそゝいで、常識的に自分の頭をこしらへてゆくことを怠らないと同時に、目に見えない時代の姿を、人生の相を、常に深く觀察することを忘れてはならなくなつた。處が時代の勢を見、人生の姿を觀照し、有ゆる方面に於ける觀察の眼を敏くすることを教へるものは文藝哲學等である。さればさまざまの文藝に接觸して、人生觀照の力を深めてゆくことは、人が眞に生きる上に於ても最も必要なことであるが、女性が眞に母たり子供の教育者たるには殊に必要なことであるのである。育兒法を立派に心得てゐたわけでは、決して子供を立派に育てあげることが出来ないのである。

だから厳密にいふと、文藝に近い精神的な方面に接觸すること多いものよりも、反對に物質的技術的方面に接すること多いもの程、一層文藝趣味を養成しなければならぬ筈である。女學校で例をあげると、専ら家政家事をやるものこそ、國文などをやるものよりも、却つて文藝趣味を養ふ必要があるのである。つまり文藝に興味をもたないで、物質方面により多く趣味を有するものこそ、一層文藝趣味を養成する必要があるのである。何となれば度々述べた如く、文藝は人生に對する目をあけて呉れるものであるからである。文藝に遠ざかつた方面に興味を有し、主として物質方面技術方面の研究をする者こそ、十分に人生を觀照すべき目があいてゐないのが普通であるからである。して見ると、職業教育をしてゐる女子の専門學校などに於ても、國文科や英文科に、例へば文學概論の必要な以上に、家事家政科には、一層文學概論が必要なのである。必要であるけれども、時間の都合上之を課することになつてゐないだけである。已むを得ず、差しあたつて職業教育に必要な技術だけ修めしめることになつてゐるのであつて、家事家政に専心するものには不必要だから、文藝的の學科をやらないのではないのである。反對に、正課的に文藝方面の課目がないとすれば、立派な人となるべく、正課以外に於て、いよく文藝趣味を養はなければならぬ筈である。さうして始めて本當に立派な女性ともなり、立派な教育者とも成れる筈である。それを考へがへをすることは、目のあいてゐない人のことであると思ふ。

七 何を以て養成するか

それほど文藝趣味が人間にとり殊に女性にとりて必要であるとするならば、それは如何にして養成すればよいか、如何にしたならば養成出来るものであらうか。

理由はあとで述べるとして、最も適切正當な方法といへば、それは先づ古典を読むことである。古典といふのは現代の作品でなく、古い時代の名品名作のことである。ところが大抵の人は、同じ文藝趣味を養ふ爲に讀むなら、近代人としての吾々の心に訴へる面白いものが讀みたい、古い時代の、微の生へたやうなものは、讀んでも面白くないから讀み續けられない、讀續けられなければ、趣味養成の目的は達成されないといふきまつてゐる。ベネットは即ち次のやうなことをいつてゐる——「自國の古典に對して、一般英人は嫌惡の情をもつてゐる。否殆んど恐怖の情をもつてゐるとでもいひたい位である。例へば極めて穩健な態度で、經驗の爲といふやうな考で古典を買ふことがあつても、それによりて決して快樂などを期待することなく、讀んで見ると決して期待ほどの興味を感ずることはないのである。いな、彼は序論を讀んで最初の一二頁に眼を通すことはあつても、文字以外には何も見ることはないのである。従つてそれが心に訴へることは何もないのである。それは恰も樹木に取圍まれてゐながら、森を見ることが出来ないと同様である。そして忽ち本を放り出してしまふにきまつてゐる。こんなものはおれには向かないが、兎に角本を買つた、そしてど

んなことが書いてあるかを知つた、それで澤山だ、此んな本を読んで面白いとかたまらぬとかいつてゐるのは、自惚れの氣取り屋か虚榮家である。かういつて暫くその古典を投げた儘にしておいて、再び他の古典をいつか手にして見るが、矢張以前と同様の結果を得るに過ぎない。かくして十年も経過すると、彼と古典との交渉は遂に絶えてしまふ。勿論新聞や雑誌の文藝に接することはあつても、決してそれ以上に出ることはない。普通一般人の文藝に關する經歷は先づこんなことで終るのである。

「普通一般人以上に純眞な考から、文藝趣味を求めてゐるものでも、古典となると喜んで之に近づくかうとはせぬ、兎も角も近代作家の作品に對すると同様な興味を以ては接しないであらう。寝る前にせめて今一頁は讀まねばならぬといふ風で、一般にいへば、其評判にふさはしい程の快樂を古典から得ることはないのである。即ち古典を讀むに方りて、快樂を得るといふよりも、務を果すとか、正しいことをするとか、自己を改善進歩させる爲といふやうな考でかゝるのである。これこそは自分の爲になるのだとか、善いものだと口にいひこそすれ、舌鼓を打つて之を讀むことは決してないのである。だから古典を讀むに方りては、先づ計劃を立て、その計劃を破るに際しては、色々の口實を案出するのである。新作の作品でも手近にあると、動もすればそれに引寄せられて、古典を袖にすることを様々に辯護するのである。是に於てか彼は自ら規定を設けて、古典を毎日一時間づゝ讀まない限り、新しいものは讀まないことにするといふやうなことにするのである。これは即ち古

典を苦い丸藥の如く考へてゐるのであつて、それを呑んだあとで、飴をなめるやうな積りで、新しいものを讀まうといふのである。眞面目に文藝趣味を求めるものであつても、それには先づ古典を讀まねばならぬといはれると、かくして自己の内心に情熱の足らぬことを密に慨嘆しつゝ、心中何者か己れに強制する所あることを感ずるのである。是に於てかつとめて古典を手にしよふとはするが、次の瞬間には之を投げすてゝ再び手にすることを忘れてしまふのである。又時々は古典的書籍を買ひもするが、事實に於ては、之をもつてゐる丈けでも澤山だ、それ丈けでも既に人並以上だと決めてしまふのである。而も腹の中では慚愧に堪へないのである。何故に自分は此作品に對して全く狂熱的になれないのであらうか、之を理解し狂熱的になるが爲には、もつと／＼勉強しなければならぬのだらうか、漠然とではあるが兎も角も憧憬をもつてゐながら、此に對して狂的になれないのは、自分が文藝趣味に對して能力をもつてゐないが爲であらうか。かういふ疑問をさへ抱くに至るであらうと思ふ。」

八 必要なる覺悟と準備

文藝に對して眞面目な憧憬をもつてゐる者でさへ以上の如くであるとすれば、一般人は如何にせば古典に對して熱情をもてるやうになるであらうか。それについてベネットは更に説いてゐる。「さて文藝趣味養成の企圖は愉快なものである。若し愉快でないとすれば成功することは出来ぬ。

といつて、それは容易なことであり、短期間に出来るといふ意味ではない。何かのゲームの達人になるといふことは愉快なことだが、それさへ正直な規則正しい努力を要する一仕事であるのである。況んや文藝趣味の養成といふやうな偉大な、素晴らしい大望を實現せんとするに方りて、間歇的な氣まぐれな努力位で、どうしてその成功が望まれるであらうか。先づその腹から立派にきめてかかつて、此問題の絶頂にまで上らねばならぬ。偉大なる企圖を達せんとするに方りては、偉大なる方法を以て接しなければならぬ。そして出發に方つては先づ嚴肅な態度で、曆の上にその日を記してかゝらねばならぬ。人間の性質は弱いものである。幸福を求むるにも、手助けとしてツリックをからねばならぬ。又時日が必要である。規則正しい、神聖な取つときの時間が必要である。多數の人々はいふであらう。自分はさうく規則正しくやることは出来ぬ。規律は人間を麻痺させてしまふと。それは極めて少數の人間のいひ得ることであらうが、大抵の場合に、規律正しく時間をきめてかゝれぬといふのは、怠慢を辯護する單なる口實に過ぎないことである。普通の人々は規律正しくかゝれないことはないと思ふ。毎週特定の日に於て、數時間を絶えず確然と文藝趣味養成の仕事に費すことにすれば、存外早く其目的を達し得ること間違ないのである。決心は人を助けるものである。これがまづ第一に必要な準備である。

「第二に必要な準備は、自分の周圍を書籍を以て包み、自分を書籍の雰圍氣の中に置くといふことである。書籍の外形といふことも、未経験者には想像以上に大切なことである。参考書を除いては、

學生には、理論上一時に只一冊の本さへあれば足る筈である。又理論上、文藝の素人は、毎日二三錢づゝの金を積んで、毎週十錢本か二十錢本を買つては、之を石油箱かビール箱かにしまつておいて、自分の文庫をつくることも出来る筈である。處が實際に於て、かうした状況で成功するには、莫大な決心がなければならぬのである。眼はへつらつてやらねばならぬ。手にもへつらつてやらねばならぬ。所有感も亦へつらつてやらねばならぬ。文藝の獲得には犠牲が拂はねばならぬ。犠牲を拂つたものは之を愛するのが人情である。種々の書籍を購入すべき精細な計劃は、もつと頭が進んでからのことにして、差當りては批評家の推薦したものは何でも買ふがよい。何を讀むべきかに關係なくして買ふがよい。そして許し得る限り美しい本を買つて自分の周圍を飾るがよい。そして有ゆる種類の文藝の風手にしたしむが爲に、一般的包括的な趣味を先づ求めるがよい。――

九 何故古典を讀むべきか

それでは文藝趣味を養ふには何故古典を讀むべきであるか。何故に文藝趣味を養はうとする初心者に對して、古典が最も適切であるといへるのであるか。一口にいふと、古典は何人でも讀むに足るほどの價值をもつてをり、又その價值にふさはしいほどの、名聲をもつてゐるからである。古典として今日まで残つてゐる作品は、誰が何といつても、決して其價值を動かすことの出来ないものであり、何人が如何に悪評をあげせかけたとしても、最早變らないほどの、立派な名聲をそなへて

あるからである。それではさうした價値は何人によりて定められ、さういふ名聲はどうして出來たのであらうかといふと、その價値は一朝一夕に定められたものでもなければ、その名聲も決して所謂大衆によりて作りあげられたものではないのである。古典の名聲は元々頭腦が優れてゐて、高い眼識をもつた少數の批評家によつて作られたもので、少數具眼の情熱家が、有ゆる方法によりて之を持ち續けてゐるのである。低級な大衆は決して永續性をもつた本當の名聲をつくりあげることがないのである。彼等の作りあげた名聲は、半月一月と持續されることなくして忽ち消失してしまふのである。試に源氏物語を例にとつて見ても、この名聲が多數大衆の力によりて作りあげられたものであつたとしたら、よく一ヶ月を支へることが出來たであらうか。大衆は本當の名聲を作り上げる力はないものである。よし又それを作り上げ得たとしても、その名聲をいつまでも持續ける情熱もなければ力もないのである。だから大衆の支持によりて、偶莫大な成功を得ることがあつたとしても、その作家は何時の間にか忘れられてしまつたり、一朝死んでしまひでもすると、大衆は之を思ひ出すことさへないのである。けれども少數情熱家が支持し來つた作家であると、彼はいつまでも少數者の情熱によりて支持され、死んだ後にも、彼等の頑固な情熱によりて其名聲を持續けられるのである。彼等は一旦支持し來つた作家の名聲を、大衆のやうに打やつて置くことは出來ないのである。それからそれと相ついで、その作家の作品を欣賞し、機會さへあれば之を論評し、研究し、或はその作品を翻刻し直したり買つたりして、其名聲を繰返しく一般人の頭につき込む

ことを忘れないのである。是に於てか、その作家が、どうならうと別に問題にするでもなく、又しようとも思はない大衆も、その作家の名や、その作品の名聲が、繰返して新聞や雑誌に出たり、話題に上つたりする中に、遂にはその作家の名聲を信するに至り、やがてはその作者が矢張天才であつたといふ説に耳なれて來るのである。

ベネットは此間の消息をもつと明にすべく述べていふ。「天才の名聲が一時代から次の時代へと、相續いて生かし續けられるのは此熱情的少數者の力によるのである。此等の少數者は常に活躍をつづけ、常に天才の再發見をやつてゐるのである。彼等の好奇心と情熱とは無限であつて倦む所がない。従つて天才の無視されるといふ機會は殆んどないのである。加ふるに彼等は常に努力を續けてゐる間に、多數者の意見に同意することもあるが、又それに背くこともあり、必ずしも常に多數大衆と同意見を持つことはないのである。大衆は名聲を作ることには出來るが、之を支持すると否とについては全く無頓着である。偶々少數情熱家の意見と、大衆の意見とが、或る場合に於て一致したことがあるとすると、多數者は即ち、成るほど此は忘れてはならぬといふが、その後少數者の刺戟がないとすると、彼等はいつかその名聲を忘れてしまふのである。反對に少數情熱家で見ると、元々文藝に興味をもち、文藝そのものが、自分に對して重要な關係があることを知つてゐるのであるから、頑張り通して、その作品の名聲を支持しようとするのである。そしてその爲には同一の陳述を繰返して續けるのである。試に路傍の人を捕へて、之に對して、シエクスピアが大藝術家

であるといふことを、何人かよく證明し得るものがあらうか。いな彼をしてシエクスピアだとか、藝術家だとかいふ言葉を理解せしめることさへ容易なことではないであらう。けれども彼に語るに十回二十回と度を重ね、時代から時代へと相ついで、シエクスピアが大藝術家であるといふことを語つたとすると、路傍の人も亦、理窟はどうでも、少数者の説を遂には信仰的に信するに至るであらう。そして此路傍の人も亦、遂には自らシエクスピアが大藝術家であるといふことを繰返して、彼の全集を買つて本箱に飾り、リヤ王やハムレットの芝居でも上演されると、屹度見物席に姿を現はして、驚くべき舞臺効果を目撃し、爾來シエクスピアは大藝術家であることを信仰してしまふのである。これは一体何故であらうかといふと、つまりは少数熱情家がシエクスピア賞讃の聲を、自分丈で密に繰返してゐることが出来ない爲である。文藝趣味養成を望むものは、以上の事實を十分につかむ必要があるのである。」

一〇 古典は永久的に面白い

それでは一体何故に少数熱情家は文藝上優れた作品をさがし廻るやうなことをするのであらうか。彼等をしてさうした態度を取らせるものは抑何であるか。そこには相當な理由がありさうなものである。ベネットは之に答へていふ。「答へは只一つである。彼等は文藝に於て永続的な強烈な快樂を見出すからである。彼等は人々が麥酒を樂むが如く、文藝を樂むのである。此快樂こそは文

藝に於ける彼等の興味を非常に激刺たらしむるものである。かくて彼等はそれからそれへと探求をつゞけて望を充さうとするのである。經驗がたまはれるに従つて、彼等の趣味は次第に確實になるのである。その趣味が確實になるにつれて、明日は退屈を感じるやうなものをとりて、今日樂を感じるやうなことは、彼等は決してないのである。そんなあやふやな趣味をもつことは、彼等にあり得ないのである。彼等が一冊の本をとりて、之に倦怠を感じ、之を退屈なものと思つた時には、一般大衆が面白い／＼といつてどんなに騒ぎ立てたところで、如何なる絶叫も彼等をしてその考をかへしめることは出来ないものである。そして又彼等がその本を面白いものだと思つた時には、巷間の群集が如何に冷淡な沈黙を投げかけたとしても、その本が立派なものであり、永久性をもつたものだとする彼等の信念を、如何ともすることは出来ないのである。彼等は自ら信する所があるのである。「それでは此等少数熱情家をして、強烈な永続的な快樂を感じしめる書籍の性質は如何なるものであらうか。これこそは實に難問中の難問であつて、未だ嘗て完全な答案を與へられたことはないのである。或はいふものがあらう。そこに眞理が含まれてをり、内觀の見るべきものがあり、知識が得られ、滑稽味を味ふことが出来、美を見出すことが出来るからだらうと。ところが此等の眞理、内觀、知識、滑稽味、美などの言葉について考へて見ると、何れも十分に明確な定義をあげることは頗る困難である。殊に眞理と美との如きはなかく説明し難い言葉である。英國の詩人キーツのいつたが如くに、美は眞であり、眞は美だといつただけでは、何となく物足らぬ所がある。といつて

それ以上に如何なる説明をすることが出来るであらうか」と。
成る程美だとか真だとかいふやうな言葉は、つきつめて見ると、なか／＼容易に説明し盡される言葉ではない。假りに

埋火や壁には客の影法師

芭蕉

われと来て遊べや親のない雀

一茶

の三句を取つて見ても、面白い、愉快だ、だから美しいとはいへるが、何故に面白く感ぜられるのか、愉快な感が起るのか、面白ければ、愉快なれば、何故美しいのかと、押しつめて行かれると、何とも答へやうはないのである。だが、本當に文藝に興味をもつてゐる人であれば、そして俳句の本當に味へる熱情家であるならば、此等の俳句の中に快樂を感じ、不思議な面白味を感じることは出来るのである。それはどの情熱家にも大体に共通である。つまり、文藝熱情家といふものは、同一のものに關して、同様に熱情的であることは、むしろ文藝上不思議なことであるのである。只ちがふといへば、同じ熱情家であつても、其興味を感じる度合は、各幾分異なることを免れないのである。一人は非常に廣く興味をもち、廣く興味を感じるに係らず、他の一人は其興味が頗る狭くして、其興味を感じる所が可成りに限られてゐるといふことはあり得ることである。それが極端になると、短歌や俳句には非常に興味をもつてゐるが、劇にはそれほど興味を感じないといふやうなことは、已むを得ないことだがあり得る事であるのである。けれども文藝の熱情家である限り、文藝の

各方面に對して、色々と骨を折つて探求をつゞけ、快樂を求めることに於ては變りはないのである。

是に於てかベネットは云ふ――

「之を要するに、文藝に對して強烈な興味をもつてゐる少數者に對して、古典は永久的に快樂を與へる所の作品であるのである。そしてそれは快樂感を新ならしむることに熱心な少數者が、永久に好奇心を有し、従つて永久的に再發見を／＼と心掛けて、それに従事するが故に、いつまでも生きてゐるのである。その他に、或作品は生かしておかねばならぬといふ特別の理由があつて、生きてゐるのではないのである。何かの法則に一致してゐるからとか、怠慢で觀過されてゐるとかといふやうなことで、生きてゐるのではないのである。只それが快樂の源泉であるが爲に、花を見のがすまいとする蜂の如く、少數熱情家が之を見のがさないから生存してゐるのである。少數熱情家は決して、その本が正しいからといつて之を讀むことはないのである。若しさうだとすると、馬が車を引つばるのでなくて、車が馬を引つばることになるのである。つまり少數者が之を好んで讀むといふことが正しいのである。だから、文藝趣味の養成に於て先づ重要なことは、文藝に對して熱烈なる關心興味をもつといふことである。それさへあれば他は自ら來るのである。差當りて何れかの古典に對して、興味を發見し得ないといつたところで、それは大して問題とするには足らぬことである。關心さへもつてゐれば、衝動は經驗を積まんことを強ふることとなり、經驗は快樂の方法を教へることになるのである。繼續した關心興味は、必ず強烈な快樂をもたらすにきまつてゐる」と。

一一 如何なる種類から始むべきか

それでは古典を読むとして、如何なる種類の古典を先づ手にすべきであるか、詩歌から入るべきか、俳句から入るべきか、物語からか、淨瑠璃からか、小説からか、劇からか、かういつて迷ふものがあるかも知れぬが、迷ふ必要は少しもないのである。何でもいゝから自ら入り易しと思ふ所から進み、自ら好み自らの氣に向き、便宜のある處から出發すべきである。

一休文藝の専門家などは、よく文藝を分類しがちである。詩と散文とか、抒情詩と、叙事詩と、劇詩とか、色々に文藝を分けて見たがるのが常である。けれども嚴肅な意味からいふと、文藝は決して正確に分類することは出来ないものである。凡ての文藝は一つである。有ゆる文藝は生活に興味を感じるから引起された感情の表現である。歴史にしても、立派な歴史は感情が源となつて書かれたものである。一個の事件を見て、それが正しく書かれてゐないとか、まづい書き様をされてゐたりするのを見ると、その不正を正し誤りを正さうとして、新に熱情を以て書かれるといふことは屢々あるのである。かのギボンの「羅馬衰亡史」やカーライルの「佛蘭西革命史」は、歴史としても優れたものとされてゐるのであるが、作者のいふ處によつて見ると、どちらも激情にかられて書いたものである。かういふ風に、これまでの多くの歴史をとつて見ても、大抵皆多少の感情をこめて書かれたものである。

歴史でさへそんな風であるから、詩と散文との間にも、重要な決定的な差別をつけることは困難なことである。詩の中には感情が多分にこめられてゐるとか、リズムがあるとかいつても、散文の中にも感情がこめられ、リズムも見出されることは屢々あるのである。文藝全般を通じて流れてゐるものは、要するに感情である。——これは必ずしも文藝ばかりではなく、有ゆる藝術にも通ずることである。——

この意味からいふと、法則や規定に従つて、まづ文藝を分類して見るのは下らぬことである。害はあつても益はないことである。分けるとか分けなまいふことは、只便宜上の問題に過ぎないのである。だかち如何なる文藝でも好む種類をとつて、文藝趣味の養成に進んでゆくといふことが、一番便利なことである。そしてそこに何かをつかんで、自分のものとする、それが最初になすべきことである。偉大なる作家が讀者に分與しようとしてゐる感情をつかんで、その種類が多數に上つて來た時に、始めて之を整理して名目をつけるといふことは、自然にやつてもいゝことである。これに反して最初から文藝の種類を分類して、取かゝるといふことは寧ろ間のぬけた事である。要するに只好きな種類から手をつけるのが一番に氣の利いたことである。

ところが此處に只一つ制限がある。制限といふのは外でもない。最初には現代の作品を避けるといふことである。これが即ち第七節の處で、文藝趣味を養成するに、最も適切正當な方法といへば、先づ古典を読むにあるといつた所以であるのである。それでは何故に古典を読む前に、近代の作

品を読んでほならないかといふと、現代の作品の方が、古典よりも初心者には面白いには面白くても、一口にいへば現代の作品は未知数のものであるからである。一人の批評家が幾らいゝものだといつても、その批評が本當に正しいものであるか、穩健なものであるか、立派なものであるか分らないからである。まして初心者には現代の作品の價値を判定する力などがあらず筈はないからである。本當に讀むに足る作品であるかどうか、十分に其價が分らないからである。之に反して、古典となると、長い間の批評によりて、讀むに足るものであり、永い生命をもつ價あるものとして、立派に其名聲が定まつてゐるからである。之に關してベネットは述べていふ――

「初心者ばかりではない、何人といへども現代の作品について、明確に選擇をなし得るものではないのである。麥の殻から麥をとり出すには、非常に長い時間がかかるのである。現代の作品は、これからまだ數代の間、審査の法廷で検査を受けなければならないのである。然るに古典にありては既に審査が済んでゐるのであるから、裁判は丁度反對になるのである。即ち初心者の趣味の方が、古典の法廷に於て審査を受けねばならないのである。此點が極めて重要である。萬一初心者の趣味が古典の味と合することが出来ないとすると、古典の方は悪くなくして、初心者の方が悪いのである。之に反して初心者の趣味が近代作品の味と異なる事があつても、此場合は初心者の方が必ずしも悪いとばかりは限らないのである。悪いことがあるかも知れないが、またないかも知れないのである。といつて誰しもまだ之を判定する權力はないのである。兎も角も初心者の文藝趣味は、まだ

形成されてゐないのであるから、こゝに權威のある案内が採用であるのである」と。

立派な案内者といふのは即ち古典である。古典を立派な案内者として、これは確に面白い筈である、だから其處に快樂を求めなければならぬ。かう信じかう決心して、廣い趣味を得ようとして、力強い情熱をもつて進むことによつて、文藝趣味は本當に得られるのである。

一二 日本文學について

何でも好む所の種類の古典から始めるが一番懶巧だといつた所で、何も分らないものには方角が立たないから、少しく案内者となり手ほどきをして欲しいといはれると、同じ文學書を読むにしても、それは外國文學のものを手當り次第に讀むよりか、先づ國文學即ち日本の文藝物を読む方がいいことはいふまでもないから、私は此處に日本の文學といふものが、いひかへれば日本人の思想感情が、どんな國民性を現はしつゝ、どんな發達をして來たかを、參考の爲に極めて大ざつぱりに、國文學史的といふほどでもないが、古い時代から始めて、少しく述べて見ようと思ふ。

さて今日世界の諸民族中に於ても、最も素晴らしい發達をとげ來つた日本民族の發生地併にその發生時代の模様については、色々の説がある。考古學や人類學の上からは、南洋とも關係してゐるといはれ、比較言語學からは、日本語は朝鮮語滿洲語なども關係があるといはれ、要するにまだ明確に決定されてはゐない。けれども此日本民族が日本といふ長細い島々に國を建設してからは、其思

想感情の流れが、文學として残つてゐて、世界の他の民族とは一種變つた、又他の諸民族のそれにも決して劣らない、寧ろ頗る優れた獨特のものさへ産出してゐるのである。そして三千年近い長い國文學の歴史を通じて、その間に中心となつてゐる日本思想日本國民精神といふものが流れてゐるのであるが、之が文學上に現はれた跡を辿つて調べて見ると、色々の時代に色々の外國文明を取入れては、次第に日本固有の輝きを發し、色彩を鮮かにして、日本といふ國の風土に育つた日本人の思想感情を、日本人獨特に發達させて來てゐるのである。

先づ日本の文學を縦に通觀して見る。日本の太古の時代から、下つて崇峻天皇の御代までは、歴史上普通に奈良朝以前といつてゐるが、此時代の日本人の思想は大體に日本人固有の思想で、既に神功皇后の時には三韓の征伐があり、應神天皇の御代には百濟から阿直岐と王仁が來て論語と千字文を獻じてをり、外國との交通も漸く頻繁になつて來てゐるが、外來思想の影響はまだ至つて少かつた。従つて此時代の文學は、内容がまだ幼稚なもので種類も少いが、その代り質の上では至つて素朴な、飾らない純粹なものであつた。此時代の日本人の生活が、如何に簡單貧弱なものであつかは、古事記、日本書紀などを見ても分るのであつて、宮廷を中心とした上流の間に、漢文字をかりて記された色々の歌謡や祝詞などが、主なる文學として僅に残つてゐるに過ぎないのである。

之については、推古天皇の御代から桓武天皇の平安遷都に至る二百年ばかりの間が、奈良朝時代と呼ばれてゐる。此時代に至りて漢學や其後渡つて來た佛教の二つが政治その他の文化の有ゆる方

面に大に影響して來て、やがて大化の革新を招くに至るのであるが、まだ國民の心の奥底にまで深く影響するには至らなかつた。此時代には既に支那から印刷術が輸入され、その他支那朝鮮の思想、文物が盛に輸入され、最も著しい勢で興つたのは佛教美術殊に彫刻であつて、今日奈良の藥師寺、法隆寺、正倉院などに残つてゐるものには、當時の文化を物語る目覺しいものがある。此時代の書として傳はる最も目覺しいものは、萬葉集と古事記と日本書紀である。

萬葉集は何時出來たか誰が作つたか明かには分らないが、聖武孝謙二帝の頃に、大伴家持が主として選んだとされてゐる此時代の歌集である。載せられてゐる歌は、仁德帝の時から淳仁帝の時に至る凡そ四百年にわたり、天武帝以後九十年間の歌が大部分をしめ、歌の数は四千四百九十六首、二十卷から成つてゐる。中にも雄大な格調をもつて歌ひ、殊に長歌に優れたものを残してゐる柿本人麿や、閑雅な調と溫健な思想とを歌つて短歌に秀で、ゐた山部赤人や、痛切な燃ゆるやうな感情を歌ひ出した大伴家持の歌などは殊に目立つてゐる。

此書は凡て漢字をかり、音と訓と兩方通用する様に相交へて書いてある。かういふ書き方を今日萬葉書と稱し、文字を萬葉假名といつてゐるが、音訓兩用といふことから、讀む上には非常に骨が折れ、これが爲に、これまで色々な讀み方が問題となつてをり、研究の書も今日では随分澤山出來てゐる。

田兒之浦從 打出而見者 眞白衣 不盡能高嶺爾 雪者零家留
田兒の浦ゆ 打出でて見れば 眞白にぞ 富士の高嶺に 雪はふりける

大伴家持の歌

妹之見師 屋前爾花咲 時者經去 吾 泣 涙 未 干 爾
妹が見し 宿に花咲く 時は經ぬ 吾が泣く涙 いまだひなくに

古事記は今日傳はつてゐる我が國の最も古い書であり、漢字で書いてはあつたが、漢文らしい日本語で書いてある。天武帝の時に稗田阿禮が、ついで元明帝の時に太安麻呂が、阿禮の口授に基づいて書いたものである。それから八年を経て舍人親王によつて日本書紀三十卷が出来たが、これは古事記が純粹の漢文でなかつたのを惜んで、わざ／＼漢文で、我國土の成立の初から、持統天皇の時までの事を書いたものである。而も日本書紀が歴史であるに反して、古事記が大體に文學から成つてゐることが、國文學の立場からいふと面白くもありがたいことである。今日では既に「三體古事記」(澁川玄耳著)といつて、現代語に譯されてゐる古事記もあることであるから、此等の助けをかりて、我が古い時代の思想と感情を知ることが何人にも興味あることであらう。

古事記の一部の例

故於是速須佐之男命言。然者請天照大御神將罷。乃參上天時。山川悉動。國土皆震。爾天照大御神聞驚而。詔下我那勢命之上來由者。必不善心。欲奪我國耳上

かれここに速須佐之男命白し給はく「然らば天照大御神に白して罷りなむ」と白し給ひて、乃ち天に參上ります時に、山川ことごとくに動み、國土みな震りき。こゝに天照大御神聞き驚かして「あが那勢の命の上り來ます故は、必ず善はしき心ならじ。我が國を奪はんと思すにこそ」とり給ひて

一三 平安朝時代と鎌倉室町時代

以上について、桓武帝の平安遷都以後、後鳥羽帝時代に、頼朝が幕府を鎌倉に開いたまで大凡四百年間を平安朝時代といつてゐる。此四百年の間に戦争といふものがあつたにはあつたが、この以前の時代や又此後の源平時代などに比べると、一層靜かな時代であつた。戦争といつても殆んど一部の戦争で、國をあげてごつた返すといつたやうな騒々しい時代ではなかつた。此大體に無事泰平の時代に於て、最も盛になつたものは文學と音樂とであつた。といつてもそれは宮廷を中心とした貴族階級の間の事で、殊に藤原氏が長い間政治上に權力を占め、後宮に對しても勢力があつたので、文筆に秀でた才媛が重んぜられ、従つて優れた女流の文學者がどん／＼と現はれて來たのは自然の勢であらう。勿論これには漢字の草書から平假名が發達し、又字畫が略されて片假名も出來たりして、それ等が大に流行し出し、男子が漢字漢文を喜んで反して、女子が喜んで此等の假名を用ひたといふことにも原因があること勿論であらう。かくして此時代には假名ばかりで書いた純粹

の國文學が現はれて來たのである。そして思想上からいふと、在來の日本の固有の思想の上に、佛二教の思想がうまくからまり合つて、面白く現はれて來たのであつた。

此時代に發達した文學には、物語、隨筆、日記、紀行等の外に、連歌、今様、神樂歌、催馬樂、朗詠など色々あり、和歌にも、題詠といふことが流行して來て、醍醐帝の時に至つて、勅撰歌集といふものが出來、先づ紀貫之が選んだ古今和歌集が現れた。萬葉集以後の名歌を集め、二十卷から成り、歌の數千百首に及んでゐる。

古今集以後に色々な勅撰集が出たが、此時代の歌人としては在原業平、紀貫之、小野小町、西行法師などを記すべきである。それから業平と關聯して忘れてなちぬのは伊勢物語である。此書は物語といふから小説らしくも思はれるが、その實は歌物語といつた方がよく、世相に對する詠嘆が自ら物語の体裁をなしたのである。かういふ風の一種の物語が後の小説的の物語を生み出すに至つたものであらう。

小説風の物語としては、竹取物語が最も古く、空想的な假作物語で、時代も作者も不明である。之について宇津保物語、落窪物語、濱松中納言物語、狭衣物語などが出たが、最も優れたものは紫式部の源氏物語である。五十四帖より成り、前の四十四帖は源氏の君を中心とし、之に紫の上を配し、後の十帖は宇治十帖といつて源氏の子薫大將を主人公としたもので、貴族階級の生活を描く間に、時代人の人生觀上に漲つてゐた、ものゝあはれを説いたものである。今より一千年の昔に成

り、世界最古の小説といはれるものでありながら、洗練され切つた筆致と、優麗婉曲なる文勢に加ふるに、構想又千古に絶した大作で、此時代によくもかゝる傑作が出來たかと思はれるほど、國文學中匹儔を見ざるものである。

隨筆としては清少納言の枕草子が第一に位するもので、觀察の敏さと筆致の簡潔にして鋭利なることは後人の模倣を許さない所である。歴史的傾向を帯びたものには大鏡榮花物語などある。共に藤原氏の榮華を描いたものだが、前者は幾分か批評の立場に立ち、後者は専ら道長の權勢を讚美してゐる點に多少の差がある。

平安朝時代について、平氏が亡びて頼朝が鎌倉に幕府を開いて後、鎌倉幕府を経て、南北朝時代、足利時代、戰國時代から更に織田豊臣が亡びて、家康が天下を一統するに至るまで、四百五十年を一括して、鎌倉室町時代の語にまとめることが便利である。つまり此時代は武人が活躍した時代で、これまでの公卿に代つて、武人が政治上の權力を取り合つて、戦乱相つぎ興亡盛衰を繰返した時代である。従つて前代に比べると非常に文學の衰へた時代であるが、それでも戰記文學として相當に見事なものが現はれたのであつた。此時代が隆替興亡の烈しい時代であつたせいもあつて、佛教が非常に盛になり、無常厭世の思想が遍なく廣まり、又主として僧侶が文學にたづさはつた關係もあつて、此期の文學には甚しく佛教趣味が横溢したのである。此佛教趣味と、一方に勃興した武士精神とがからみ合つて生み出されたのが此時代の文學の特徴であつて、後の和漢混淆文の生まる、

に至るまでの剛健雄大な筆致がよく此特徴を表はすことが出来たのである。

此時代の和歌には新鮮味は乏しいが、土御門帝の時に定家等によつて選ばれた勅撰集新古今和歌集について、勅撰集が十三集も現はれ、古今集以後の七集を加へると、二十一集の勅撰集が出来てゐる。之を總稱して二十一代集と呼んでゐる。

隨筆としては、鴨長明の方丈記の外に兼好法師の徒然草がある。前者には厭世主義に立つた佛教の無常觀が熱情をこめて書かれ、後者は長短の斷篇二百四十から成り、敏い眼で觀察した、世相の矛盾撞着を輕妙な文章で描いたもので、佛教思想に老莊の虛無思想をからめて、辛辣な皮肉と滑稽味とに痛快を叫ばしむるものがある。徒然草は清少納言の枕草子と共に、我隨筆の粹とされてゐるが、廣く讀まれてゐることは枕草子の上にあるかも知れぬ。

所謂物語類も頗る澤山現れたが、何といつても此時代の特色の一つをなすものは、戰記文として、普通の物語と區別される保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記、義經記、曾我物語、太平記などが有名である。就中最も傑出したるものは平家物語である。

平家物語は平家の興亡史である。興亡史であるといつても決して單なる史實を書いたものではなく、さしにも驕慢傲奢を極めた平家が、度々の争乱の後、新興源氏の勢力によつて遂に亡ぼされゆく悲惨なる衰亡史に交ふるに、想像や傳説などを加へて、榮枯盛衰生者必滅の理を説いた悲痛なる一大劇詩であるのである。而も其筆致甚だ流暢華麗なるが爲に、琵琶の伴奏をかりて、琵琶法師に

吟誦せられることとなり、久しきに亘りて、それが一般殊に武士階級の娛樂の役をつとめつゝけたのであつた。別に室町時代に發達して、中流以上の娛樂として、大きな役目を果したものに、謡曲と狂言とがある。此等は後代の戯曲の祖をなすものであつて、外國に其類を見ることが出来ない珍品である。此外に文學としてよりも國史として名高いものに神皇正統記がある。

一四 江戸時代と明治以後

江戸時代は平安朝時代にも増して平和の時代であつたが爲に、文學の隆盛なること平安朝時代にもまさり、殊に上流社會が衰微して平民が勃興するに至つたので、俳諧だとか、淨瑠璃だとか、歌舞伎だとか、川柳狂歌だとか、小説だとか、色々な新しいものが生れて來たのである。加ふるに明治以前二百五十年にわたる此時代は、吾々の時代とも密接な關係があり、今日の文學の幼芽は既に此江戸時代に發生してゐたのであるから、文藝初心者が取つてその趣味を養ふには最も適切な古典が頗る澤山にあるのである。

俳諧の方面に於ては芭蕉と、之について蕪村の作は最も代表的のものであり、情味と輕妙に富んでゐるものには一茶の作品がある。俳文として最も名あるものには芭蕉の奥の細道と横井也右の鶉衣がある。淨瑠璃としては竹田出雲、近松半二、並木宗輔等の名作もあるが、此等の作者のは今日歌舞伎に於ても屢繰返されてゐる。けれども此等の作者の作よりも、もつとく淨瑠璃としての特

徴を多分にそなへて、我劇界に嶄然として頭角を擧げてゐる近松門左衛門の諸作は、文藝の研究者にとりて様々の點から殊に興味あるものでなければならぬ。

今日の寫實小説の祖ともいふべき井原西鶴の作にかゝる一代男一代女五人女の如きは、浮世草子の名に知られ、元祿情感解放時代の世相を描いた寫實小説として將た其藝術價值の上から、近松の淨瑠璃と對立するものであつて、江戸文學中、少くとも芭蕉と西鶴と近松とは、どの道一通りは研究されなければならぬものである。

此外に何人も其名を知つてゐるだらうものに八犬傳と膝栗毛とがある。前者は南總里見八犬傳といつて瀧澤馬琴の著であり、世界にも珍らしい長篇である。後者は十返舎一九の著にして東海道中膝栗毛と呼ばれ、滑稽味に富んだもので、近頃時々歌舞伎に改修上場されてゐる。

古典々々といつても、我國文學を通じて、殊の外目星しいものといへば、以上の如く全く數へるほどしかないのである。それらの中何れかをまづ手にとつて熟讀すべきである。そして興味さへ乗つてくれば、以上の主なるものは、一通り讀むべきである。勿論一通りといつても、全部を一讀するには何年かを要すべき筈である。近松一人の淨瑠璃を讀むにしても、ひよつとしたら半年も一年もかゝるかも知れないのである。尤も近松を讀むといつても、差當つては世話物二十四篇丈け讀むのであれば、それほど大した時日もかゝらぬ筈であるから、是非一度は二十四篇の世話物位は讀むべきである。それに近松の淨瑠璃となると、時代も近いし、筋も面白いし、歌舞伎劇とも縁がある

し、文章も素晴しく魅惑力をもつてゐるから、決して退屈を感じることなく、随分興味をそゝられるであらうと思ふ。

明治以後の作品となると、凡てがまだ古典といふには距離があり、子規の俳句や、漱石の或作品の如きは、後世に傳はるかも知らぬが、其他はまだ全くの未知數であつて、此處に列記することはあまりに無謀であると思ふ。

外國文學の方面を見ると、随分澤山讀むに足るものがあり、大体は今日日本語に譯されてゐるから、讀むにも骨は折れないが、餘りに澤山あるので、却つて選擇に迷ふのが一般の状態であらうと思ふ。先づ國文學のものを讀んだあとで、暇があつたら讀むべきものは、ゲーテのファウスト、ミルトンの失樂園、シエクスピアのハムレット、マクベス、オセロ、キングリア、イブセンの人形の家及幽霊、ドストエフスキの罪と罰、トルストイの復活、メーテルリンクの青い鳥などであらう。その他現代作家の作品まで數へると無限であるが、何れにしても十九世紀以後の近代作品には、現實主義的傾向と、個人的傾向と社會的傾向が著しく目立つて、作者の個性を明にし、主觀を強調したものが次第にふえて來てゐることが認められると思ふ。そして此種の外國文學は明治以後に於て盛に輸入され、その他の色々の文化と共に怒濤の如く我國に侵入して來たのであるから、明治以後の日本精神も日本文學も之等の爲に少からず影響を受けたのであつて、それらの状態が現代の文學の上には著しく現はれてゐるのである。

一五 古典に接する用意

これまで度々述べたが如く、各其好む所に従つて文學の研究を進めるが懶巧であるとしても、文藝趣味の養成には、或程度の努力が入用であることを忘れてはならぬ。換言すれば、それは新聞や雑誌を読むよりも、一層の忍耐と決心とを要し、随分頭を使はねばならぬといふことである。只遊び半分、慰み半分でかゝつたのでは、完全な文藝趣味の養成は決して出来ることではないのである。

さてかうして忍耐と決心とをもつて、以上略述した國文學中の粹である古典の何れかを取つて、初心者が讀んだ後の結果はどんなものであらうか。思ふに豫想したほどの興味が得られないために先づ大抵は失望することであらう。中には或は讀みつゞけることを苦しみとするほど倦怠を感じるものがあるかも知れない。或は遂に半途で折角の本を投げ棄てたりするものがあるかも知れない。けれども誰しも部分的には、古典に於て何等かの興味を見出し得るだらうこと又は疑なからうと思ふ。して見ると、古典を手にするほどの熱心があるにも係らず、其處に十分の興味を見出し得ないとするならば、それは讀者に熱情の度が足らないといふ缺點がある爲である、少くとも狂熱でないが爲に興味を得ることが出来なかつたり、倦怠を感じたりするのである。そしてそれは古典に對して輕侮の念をもつてかゝり、古典の作者を馬鹿にしてかゝるからである。之に對してベネットはいつてゐる。

「古典に接するに方りては、吾々はまづ頭腦優越者の前に立つてゐるといふことを記憶しなければならぬ。實際日常生活に於て、吾々が頭腦優越な者の前に立つてゐる時には何事が起るであらうか。之を判定するには、吾々が頭腦劣等者の前に立つてゐる時を思ひ出せばよいのである。吾々が頭の劣つた人々の間に在る時、吾々の云ふ所が彼等に十分に理解されるであらうか。彼等は屢意味を誤解する。吾々が冗談をいつても彼等は笑ひもしない。彼等には高級な冗談は分らないのである。彼等が顛を解き腹をかゝへて笑ふのは、子供らしい馬鹿々々しい事である。吾々をして狂喜せしむる美は彼等には分らないのである。彼等は吾々が以て粗野と思ふやうなことに對して却つて狂喜するのである。彼等の眞理とするものは、吾々にとつては何等の價值もない茶飯事である。彼等の感覺は比較的粗野なものである。之に反して吾々の感覺は比較的微妙であるのである。吾々は彼等をして物を理解せしめ、何かを見せしめ知らしめようとする。そして彼等が若し自分達の劣等者であることを知り得たとすれば、吾々は幾分の成功を得たのである。けれど彼等にして若し自分達が劣等者であることを氣附かないとすれば、吾々は如何とも仕方のないことを思ふて此上喋ることや止め、彼等の自己満足に放任するにきまつてゐるのである。誰しも頭腦劣等者に出遇つて、かういふ經驗をつんだことは屢あつた筈である。古典に接するに方りては、吾々は自らを頭腦劣等者の地位におき、有ゆる自惚を取去つて、自分の頭腦の劣等であることを承認し、一步でも優秀な地位に上らうと考へることが眞に賢明なことである。自分が頭腦劣等者であることを疑はない頭腦劣等

者は、何の望もなきものであることを常に考慮すべきである。かくして古典の作者に對するに方りては、彼は吾々よりも美に對しては一層敏感であり、精緻であり、偉大であり、力強いものである。だから吾々は彼の案内する所に導かれなければならぬと思ふべきである。換言すれば、吾々の態度は、遠方にある音を聞かんとして耳をそばたて、全心を傾倒すると同様に熱心に注意深くあらねばならぬ。従つて決して仕事を急ぐやうなことなく、忍耐をもつて殊に注意深く進まねばならぬ。手取早く批評のやうなものを讀んで、古典の内容を一散に吞込んでしまはふとするやうなことをしてはならぬ。先づ作品を讀んで、自分自らの何かの所感を得てから後に、参考として他人の説明や批評を讀むが一番いゝことである。さうする方が一層功果的であり、得る所が多いのである。」

更に古典に接するものゝ心得て置かねばならぬことは、古典から得らるゝ快樂は決して劇烈なものではないといふことである。古典の興味は微妙なものであつて、段々に其後徐々に高まりこそすれ、決して最初から強烈なものではない。一体低級な頭腦の求むる藝術的快樂は一般に劇烈なものである。劇烈な快樂といふものは、物事が恐ろしく誇張されたり偏することから起るものであり、従つて粗雑であり辛辣である。けれども古典の快樂は一方に偏したものでなく誇張から出るものでもなく、あくまで釣合のとれた微妙なものである。抱腹せしむる快樂でなくて、密に忍びよる快樂である。何ともいへない靜かなうま味から來る快樂である。腹を抱へさせるよりも魂の微笑を起させる快樂である。はあくゝと笑はせる下品な快樂でなくて、にやりゝと微笑させる品のいゝ快

樂である。上つらな浅い快樂でなくして深味のある高尚な快樂である。高級な文藝趣味を味ははうとするものは、腹をかゝへさせるやうな笑を起すものは、むしろ低級な面白味であることを十分に理解してかゝるべきである。之を忘れると古典は一向に面白いものではなく、むしろ失望を投げかけるものである。

一六 女子と短歌と俳句

私は前に文藝趣味は殊に女子に必要であり、此趣味の養成に努力すべきであることを述べた。私は更に一步を進めて、出来ることなら日本の凡ての女子、少くも女學校卒業以上の頭をもつた有ゆる女子は、短歌か俳句の作れるやうになつてもらひたいことを望まないではゐられないのである。これが爲に既に随分久しい間、私は女子の間に短歌と俳句の會を設けて、此道に進む人の一人も多からんことを求め、添削しては奨励を續けてゐるのである。私は此書の讀者であらうと、何人であらうと、志ある人を導びきたいと思ひ、殊にそれが初歩の人であればあるほど一層導びいて行きたいと思ふのである。

何故に私は日本の女子に向つて短歌や俳句をつくることを勧めるのであらうか。いふまでもなく、短歌や俳句は我が文學としては最も短かく、最も簡単な形式のもので、誰しもはいり込むに最も便利であるからである。そして女子に文學趣味が殊に必要であるならば、此最も簡單にして最も入り

易い俳句や短歌の道に進むことは、一番都合のいいことであるからである。

蓋し短歌や俳句のやうな文學、藝術の創造をするといふことは、單に文藝趣味を養ふといふことから一步を進めて、吾々のなし得る最高の文化生活の一つを營むといふことである。功利をはなれ全人格を傾けて、何のわだかまりもない、何物にも囚はれない、自由な精神の世界に遊び、自己獨特な高雅清淨にして、奥ゆかしい、澄み切つた、文藝乃至藝術創造の生活に心を向けるといふことは、人間が最も生き甲斐ある生活を體驗するといふことである。子供といふ詩の魂に最も關係の多い、そして又男子よりも遙かに豊富な感情を恵まれてゐる女子にとつては、短歌や俳句をもつて、かうした藝術創造の生活に入ることは、最も便利でもあり又意義あることである。

子供を見てゐると男子にも様々の詩趣が限りなく湧くのであるから、子を受することに於て男子以上である女子、殊に母親にとりて子供に接して湧き上る詩趣は無盡藏である筈である。限らない詩趣を常に子供から恵まれてゐる女子は、常に自ら感じた喜や惱や苦みや煩や驚きや様々の感情を、自分獨特の言葉で、思ふが儘に只聲をあげて歌へばいいのである。それを歌に俳句に歌はないといふことは、折角の子供の贈物を無にすることである。それは子供の心を殺すことでもあり、子供を育てる上に於てもどれ丈けか損なことである。子供の頭をなで、やることよりも、子供に立派な着物を着せてやることよりも、子供からの贈物である詩趣を短歌や俳句に歌ひ出して、ノートに記しておいて、やがて子供に見せてやるといふことは、どれ丈けか立派な貴いことではなからう

か。育児法や料理や編物には心をよせ趣味をもつてゐても、子供の爲に歌ふことに趣味をもたない母親ほど憐れなものはないと思ふ。否、前にも述べたやうに、さういふ母親であり文藝に趣味の乏しい女子であればあるほど、私は一層短歌や俳句の道に進まうと心掛けることを勧めたいのである。それは人間を一層高潔にし、上品にし、物事に對する趣味を深め、觀察力を敏くするからである。人間最高の生活に與ることになるからである。詩なく歌のない女子は要するに美しい人形である。形はやさしく美しくても、魂のない人形では如何にも人間としては慘めだからである。

俳句を作れ、歌を作れといつても、何も専門の俳人や歌人になれといふのではない。只自分の純一な心持を、子供やその他の自然や人事の様々な姿に對して、すなほに述べる事が出来るやうになりさへすれば足るのである。裁縫の間にも、洗濯の間にも、添乳をしてゐる間にでも、見聞したり感じたりした事を歌にし句にし得るやうになればそれで澤山である。美しい景色を見た時や、苦しいと思ひ惱ましいと思つたことを、いつか歌ひ出せるやうになればいいのである。それによりてどれ丈けか苦をいやし、悲を和らげ、怒りを慰める事が出来るかも知れぬ。どれ丈けか生活朗らかにし生甲斐ある生活を生きることが出来るかも知れぬ。

それだのに歌や俳句をやつてゐた人が、家庭の人となつてしまふと、歌を詠むどころか句を見るどころか、雑誌一つに目を通す暇がないといつて、折角今まで歌や句に心を寄せてゐたものが、その方に全く見向きもしなくなる人が屢ある。かういふ人は折角開きかけてゐた眼をつぶり直すので

ある。折角趣味を体得しかけてゐたのが逆もどりする人である。折角子供を上品にそだて自分も品性を高め、本當に生き甲斐ある生活を生きかけてゐたのが、子供を殺し自分も自殺するのである。淺ましさを通り越して氣の毒千萬でならぬ。かういふ母親に育てられた子供は全く禍であると思ふ。

歌や俳句の専門家になれといふのではないが、歌を俳句をやり出したからといつて、半年や一年で上手になれると思ふと大間違である。裁縫ですら一人前になれるには二年や三年はかゝるのだ。文藝趣味をつかんで、思ひのまゝに感じたことがうまく歌や俳句に作れるやうになるには、少くも三年や五年はかゝる筈である。常に心に向けてゐて作つては直してゐたり、先覺者に見て貰つてゐたりして、長い中に自然に物になるのである。そして何人でも、どんな才能のないものでも、その中には屹度一人前になれるのである。いつか見聞き感じたことが、自分一人でも角もすらすらといひ表はせるやうになるのである。それをたまに一度や二度作つて見て、思ふやうに作れぬとか、うまいものが出来ないからといつて、自分には才能がないのだ、自分には向かぬことだといつて、悲觀したり止めたりするのは、富士山に上りかけて、二三合目まで行つて、遊んでゐたり後歸りをしたりするのと同じである。いつまでたつても頂上に達することも出来ねば、美しい心持を味はふことも出来ぬと同じである。

或はいふものがあらう。日本の女子はそれでも忙しくてならぬ。そんなのんきな事が出来るものかと。ところがよく考へて見ると、必ずしも爲さなくもよいことが色々ありはせぬか。いな

眞に生きる手段よりよりも、何が大切なことがあるのか。私はこれに對してはかう答へたいのである。

人間は只生れて食つて死ぬる丈けでは満足出来ない筈である。それ丈けなら犬でも猫でもやるのである。立派な着物を着る、となら猿でもする。うまい物を食ふ丈けなら犬にだつて随分ゑらいのがゐる。贅澤な生活をするとか、榮耀な暮しをするといふことは、人間の窮極の目的ではない。そんなことは末の生活である。

かの着飾つて人形のやうな風をしてゐるおしやくを見た時に、少しく頭のあるものはどんな氣がするであらうか。何も分らないで満足してゐるやうな彼等を見た時に、吾々は只憐みを感じるのである。之と同じやうに、詩のあり歌のある、高い文化生活をしてる人から見た時に、詩のない歌のない人はどんなにか氣の毒に思はれるのである。

人は眞に生き甲斐ある生活を生きねばならぬ。吾々が自分の感情を純一にし自分の品性を高め、高雅幽妙なる藝術創造の生活に與り、國の文化生活を進め、人類の幸福を進める文化生活に参加することは、やがて始めて生き甲斐ある生活をしてゐるといへるのである。

近代藝術思潮講話綱目

二、近代又は現代の意義——レナイサンス、クラシズム、ロマンチズムの意義——十九世紀中葉以後の藝術と現代藝術——その三大傾向、現實主義的傾向、個人的傾向、社會的傾向——未來に生きんこする新藝術、個性に目覺め、主觀を強調し、社會意識に目覺めた現實的傾向。

二、レナイツサンス（文藝復興）

十五六世紀頃に伊國に源を發した一種の解放運動——自由な自然人の發見——個人の解放——思想上生活上、自由平等の要求——現代文化の出發點にて、中世の混沌たる生活から目覺めて經濟的に社會的に、精神的に新生活に入る第一歩。

三、クラシズム

十七八世紀の歐洲藝術——佛國を中心に、範をギリシヤ、ラテンに取りて、形式尊重、内容よりも統一、スタイル、規律等の形式的理智的方面を尊ぶ傾向——古雅端麗、形式と内容の一致を重んず——尙古、擬古、古典主義。

四、ロマンチズム

古典の形式に合せぬものを排斥する風に對する反動。即ち人間の精神的活動を型に入れや

らこする傾向の反動——主觀的な、極端な自由と奔放な感情、豊富な感覺の尊重——一七八九年の佛國革命以後——情緒的、空想的、耽美的、陶醉的傾向の精神主義、理想主義、非科學主義、唯美主義、藝術至上主義。

英、シエライ、キイツ、バイロン、スコット。獨、ゲーテ、シラア、ハイネ。佛、ユーゴ
オ——ゲーテ（一七四九——一八三二）のウエルテルの悲、ファウスト等不朽の名著。

五、自然主義（ナチュラリズム）

現實を無視し、空想のみを追ふ傾向に反抗し、科學の發達につれ、經驗に重きを置く科學主義の勃興——十九世紀中頃文藝界美術界思想界を風靡す——空想を去つて、現實に重きをおき、現實尊重、物質的、科學萬能主義的、唯物主義的現實主義——文藝の自然主義と美術の印象主義。

ニイチエの本能主義、ツアラツーストラ。ゾラ。モオバツサン。イブセンの人形の家、幽靈。

印象派ドガ、モネ、ルノアル。ついで主觀的傾向の強き後期印象派のセザンヌ、ゴッホ、ゴーガン、マチス。

六、人道主義（ヒューマニズム）

自然主義の墮落、人生の裏面、暗黒面の暴露——眞善美に對する高遠な理想の追求——人

類愛の謳歌、人生の喜の描寫——人文主義ともいふ——精神方面からの反抗運動。
トルストイ、ドストエフスキー。

七、主観主義の藝術

主観的傾向の強調、表現の方法、形式上から自然主義に反抗し、人物や物を材料として、作者の主観、氣持情調を最も直截的に明晰に表はさうとする——表現派、立體派、未來派、構成派。

エキस्पレツションニズム(表現派)——カイザア、トルレル——キュビズム(立體派)——フューチュリズム(未來派)——マリネツチ、カンヂンスキー——コンストラクチヴィズム(構成派)——ロダン、マイヨール。

八、デモクラシーの意義と傾向

自由と平等の觀念を人間生活の各方面に實現せしめんとする傾向努力——人と國と、時代によつて種々の傾向——政治、社會、産業、文化、國際諸方面の傾向。

九、社會主義の概要

廣義及狹義の三大別——父は佛國革命、母は産業革命、十八世紀以來の自由平等博愛の三つが政治的に現はれて革命思想、産業上に現はれて社會主義——各種の社會主義の共通點マルクス(一八二一—一八八三)とマルキシズム——社會主義の長所及び短所——コムニ

ユニズム——婦人と社會主義

一〇、婦人問題の概要

婦人解放論(フェミニズム)と其内容——各種の婦人運動——母性保護論——婦人参政權運動——婦人労働及職業問題——女性中心説——新しい女、ノラ、マグダ、ジャネット。

一一、近代劇と歌舞伎

近代劇——近代及近代人——近代人の生活、生存競争、争闘、煩悶、懊惱、懷疑、不安、生活苦、神經質、——人と人との關係が複雑、社會的、普遍的、人類的——個人と社會國家との關係が密になる——形式主義の頽廢、精神主義の尊重。

特殊の發達をなせる歌舞伎劇——能樂、操り劇、淨瑠璃、歌舞伎劇。

△歌舞伎劇——一、理智的要素の缺乏——二、筋の興味——三、音樂、義太夫、常盤津、清元、三味線、音聲。動作のリズム、型、舞踊的。色彩。感覺陶酔的、感情的。原始的。感情が基調。人物が思想的でなく、非論理的で矛盾だらけ、不合理、不自然、誇張——四、時代的背景が正直に描がかれてをらぬ、思想的にも偽が多い——五、科の劇——六、取材の範圍が狭く、義理人情と戀愛が其大部分——七、大体に外面的で、遊戯的分子多く、悲劇が多い——八、淺薄な勸喜戀惡主義。

△近代劇、新しい芝居——一、理智的、遊戯的よりも理屈的、議論的——二、筋は第二義

的、殊に表現派、構成派。作中の人物をかりて作者の思想主観の發表——三、音樂的でなく、感覺的でなく、複雑な感情、成るべく誇張をさける——四、時代の精神空氣にふれ、社會的、民衆的、社會劇——五、科の劇よりもむしろ白の劇。殊に主観主義の劇然り——六、取材の範圍廣く、社會の各方面の有ゆる事象。三角關係、兩性問題、性の惱、性慾教育、花柳病問題、遺傳の恐怖、新自我と信仰の争——階級的不公平、勞賃問題、家庭悲劇、新舊思想の争、宗教と民族の惱等の有ゆるもの——七、主として内面的で、悲劇と限らず、高級な喜劇、史劇、氣分劇、象徴劇。嚴肅なる靈の芝居、心の劇で、形や感覺の劇にあらず、永遠の望み憧れの叫。——人間の生活。イブセンの幽霊に含まれた深い思想——近松の劇に現はれた婦人觀、諦めと、心中讚美と、滑稽的遊戯分子。

眞に羊を導くもの

戦争でなければ、小さいお葬式でもいい。前衛や先頭が大提灯をふりかざして、後衛や本隊や、乃至大切な事情や状態なんかちつともかまはずに、さつさつと向見ずに進出をつとけるとする。戦争は一体どうなるのだ、お葬式はどうすればいいのだ。戦争は時機を逸して遂には却つて手がつけられなくなり、葬列はどの方面へ、さういつていゝか分らなくなりはいらないたらうか。そしてまたそれで前衛や提灯持の役目が果されたことになるといふのか。

これが今日の我々の前にまさしくと見える思想界や文藝界の状態ではないか。

でも戦争や葬式の場合はまだいゝ。本隊は兎に角自己の意志をもつて、どうにか目ざす方向に勝手に進むだらうが、社會や思想界では相手が羊である。羊飼が羊を顧みないで、勝手に一人でずん／＼思ひの儘の方向に進んで行つたのでは、羊は遂に適歸する所を知らないことになりはせぬか。

然も羊である一般大衆の前には、さまざまの誘惑があり束縛が暴威を逞しうしてゐる。因襲、傳統、現實主義、生活難、感覺的自己陶醉、商賣主義、ジャーナリズム、拜金主義、資本主義、かうし

たさまざまのものは、四方八方からがんぢからめに、餌となり釣針となりて、羊や山羊を玩弄物にしてゐる。彼等は自ら目覚めんとしつゝあつても自分をどうすることも出来ない。因襲を去つて新なるものに向はんとしても、そこにはまた新なる悩みと束縛と苦みと犠牲と無趣味とがある。一たび目を開きかけた彼等も社會的の威力に壓迫されて再びへとくになつて逆もどりする。逆もどりするのはまだ盲目的な丈けに無事な方であつて、少しでも本當に開きかけた目は、いたづらにその歸ることも許さない。彼等の前には宗教も藝術も政治も科學も哲學も一切が既に力を與へる權威をもつてゐない。進まんとするには羊飼は餘りに遠く行き過ぎてその姿の見えない所にゐる。羊の大衆は戦慄しつゝ適歸するところに迷つてゐる。

二

此大衆に向つて思想家は藝術家は文藝家は今何をなしつゝあるか。自ら最も新しいと思惟せる人々は、自ら羊飼の地位に立てりご自任しながら、實は羊の存在を忘れてゐるのではなからうか。羊はやはり羊である、山羊はやはり山羊である。羊に自動車の後を追へといふのは無理ではなからうか。かうした前衛的藝術家や思想家と大衆の間につつ、寧ろ大衆を利用して漁夫の利を占め、私腹を肥して、公然大衆を毒しつゝあるものは、むしろ資本主義や商賣主義やジャーナリズムではなからうか。金の爲に書き、金の爲に賣り、金によつてのみ生き、金の爲に賣れるものゝみをかつき、資本主義の奴隷となつて、どこまでも自己陶醉の世界にのみ享樂する。彼等には自己陶醉の外には何の

目的もなく、盲目なる大衆の小羊は彼等の享樂の爲の犠牲に過ぎない。大衆こそ實にいゝ面の皮である。彼等の社會に及ぼす害悪やむしろ驚くべきものであつて、文化の進展を毒することあけて數ふべからざるものがある。新文化の建設に向つて努力し、新時代の創造に向つて心を致すものにして、此呪ふべき商賣主義とジャーナリズムと資本主義に向つて眞剣なる戦を宣し、之に向つて専心するもの現に誰があるといふか。

三

私達はコミュニシヤリズムの弊害やジャーナリズムの弊害や資本主義の害毒については、必ずしもモリスばかりでなく、可成に多くの人からきかされた。殊に文藝に關係せる人々の此に向つて慨歎せるをきいたことはあけて數ふることが出来ない。けれども之を慨歎し之を憤怒せる文藝家も、金城鐵壁たるの感ある此等の呪ふべき傾向に對して、戈を揮つて戦ひつゝある中にはいつかその捕虜となり、いつの間にか彼等の走狗となつて、商賣主義の爲に戦ひつゝあるではないか。かくして此惡むべき傾向はまた永遠に文藝上の殘されたる一問題として存在せざるを得ないのか。

文藝及思想上の戦線に立つ人々には、或はこんなことは眼中にないかも知れぬが、自ら羊飼となつて山羊や小羊を導かんとするものには、必ずしも先頭に立つて一人で馳け出すことではなくて、むしろ此眠れる、そして吾々の側にうよよする大衆を毒しつゝ、漁夫の利を占めてゐる忌むべき傾向を打破し徒輩を驅逐することの方が、第一になすべき事ではなからうか。此呪ふべき憎むべき大傾向

に向つて、勇ましく孤軍奮闘をつゞけ、血みどろになつても猶泰然として戦を止めない新時代の眞の勇士はどこにゐるのか。彼の手によつてこそ新興文藝の創造と、やがて新なる文化の創造と、新しい時代の制作は可能であるのではないか。そして此取残されたる一大問題を解決するものこそ、眞に大衆の前に立てる羊飼といふことが出来るのではあるまいか。要するに前衛の長驅もいゝ。だが忘れてならぬは大衆の羊である。眼覺めかけてゐるが如く見えて、實は眠つてゐる大衆である。此大衆を眞に導く者は商賣主義等々の破壊にあらずしてそも何であるか。

最後の路

九月の一夜である。

私はペンをおいて、窓からちよいと顔を出した。

風がひやり／＼とボブラの小枝をわたつてゐる。

「おい、君はいつまでぐ／＼してゐるんだ。ね、何をそんな所にま／＼してゐるんだ。早くやつて来いよ。早く」

あるかないやうな囁が私の耳にきこえて来る。私はきよろ／＼見廻した。邊りには誰も居ない。

不思議に思ひながらきよとんとしてゐると、囁がまたきこゑる。

「きよろ／＼しなくともいゝ、君だよ、君にいつてるのだよ」

私はきまり悪くなつて、ぢつと月を眺めた。月は皮肉な顔付でにやり／＼笑つてゐる。私はじつと考へた。

さうだ。本當にさうだ。おれは一體いつまでま／＼してゐるのだらう。此間だつて、あんないゝ機会はなかつたに、何故決行しなかつたのだらう。いくら環境が、世間が、社會がそれをとめたところで。決然としてやるべきであつた。決行しなかつたのは唯自分に野心があつたからだ。今一

年も立てば、折角研究しかけて来た近松の淨瑠璃の片が大體につくからだ。同じ世を遁れるにしても、人生を去るにしても、あれ丈けはどうしても片づけてからにしたい。その外には何の望もなければ慾もない、これを打やつた儘で、今直ぐ最後の路に急ぐのはあまりに惜しい。それでは、今まで生きて来たこと、いや生れて来たことさへが無意味になる。どんなことがあつても、あれ丈けは終りたい、あれを始末をつけてから總勘定をしたい、かう考へたからであつたのだ。

それはさうにちがいない。だが此人生に、一體何の見込があるといふのだ、自分のやうな懸命な生活を、純真な心で打つづける丈けの價値がどこにあるといふのだ。

自分は子供の時に叔父に向つて質問した。學者にならうか、奇人にならうか——奇人といふのは、變つた人、人並ならぬ人、常人以上の人、一切の因襲と束縛から解放された新人、傑出したる理性の人、といふことであつた。叔父さんは十二三の子供の此質問を充分に理解してくれなかつた。そして直ちに學者の方がいゝだらうと答へた。

が、自分はどうしても第二の方向に進みがちであつた、そして父の意志に反して、先づ官吏、政治家になることを逃避した。自己をもたないで、ペコ／＼と頭を下けて、裏路ばかりを這ひあるく官吏、嘘と罪惡とででつちあけたやうな政治家、これは自分の最も申込み嫌ふ所であつた。當然の結論で自分は文學に歩みを向けた。だが文藝の道にも矢張裏路は到る處にあつた。愛想をつかし切つた自分は、遂に叔父の賢明の前に屈服しようとするのだ。そして此歳になつて今更のやうに狂人の

やうに近松をいぢりまはしてゐるのだ。

だがあまりに巨大なる近松は、一年や二年の生半途ないぢり方では、どうにもならない。天才が幾人かゝつて、一生を費しても、どうにもならないかも知れないしろ物である。それを自分はまだ數年間しか没頭してゐないのだ、この後一年二年たつたつて、何程の事が出来るものか。さうかも知れない、／＼。けれども今までにつゝきくさした人とは、慾目かしらぬが、幾分異つた方面をいぢつてるやうな氣がする、今までの日本の文化に及ぼした近松の力の幾分かを、今までの人よりか幾分か具體的に示し得るかもしれないまでに、少しは仕事が手についてゐるのだ。それ丈けでもせめて活字にしておいてから、最後の路に進みたい。自分はそれが爲に寢食をさへ忘れてゐるではないか。

何一つ頼むに足る力もなければ、何一つ絶對のものを認めることの出来ない人生だ。けれど自分は自分の爲すべき務だけは信じたい、自分の力を信じはしないが、自分の務だけは果さねばならぬことは之を信じたい。でないと自分が今まで生きて来たことがゼロになる。これ丈けは死と戦ひ罪と戦つても、それを果してからいさぎよく最後の路に欣然として進みたい。

「まつて下さい／＼、その時まで、も少しまつて下さい、——も少し／＼！——その時こそ誰がこんな馬鹿／＼しい處にぐ／＼してゐるものですか」

私は忍び聲ながら月に答へた、私の眼から熱涙が他愛もなく流れつづけた。

月はうるんだ顔付で相變らずにやり／＼してゐた。

決して冗談ではない。今の私は此覺悟で努力をつゞけてゐる。そして萬一にも私が此仕事を果さないで、最後の路を撰ばなければならぬやうなことがなけれかし、そして、諸君に迷惑をかけるやうなことがなければと私は日夜祈つてやまない。

私の此嚴肅な最近の告白を讀んで、そも幾人が襟を正されることであらう。

兩脚はをり／＼行かず歩むことくるしくなりて路に佇ずむ

ぐにや／＼の腰のつぶれて歩むこと堪へぬがまゝにつくばひ笑ふ

脚ゆかず腰の立たなくなればなれ腕だにきかばペンを放たじ

永久に見えなくなれば如何にせんと思ひつゝ目をすり床につく夜半

この腰がこのまゝぬけて階段をころがり落つる日も近からむ

伏せんにも仰向かんにも背はいたむ夜晝起きてペンを運ばむ

燈臺の灯は薄らけり大いなる錨下ろさん明日の朝かも

痛ましき母性愛

大抵の親は自分の子を自分の一部であると思つてゐる。いな自分の生命とさへ思つてゐる。子あるが故に自分があると思ひ、子故ならばさんな苦勞をもいとはないといひ、また事實に於て、子故に甘んじて慘ましい經驗を重ねつゝある婦人が少くも日本には澤山ある。

これは主として母としての本能の愛が然らしめるのであるから、別に不思議でも何んでもなく、むしろ當然のことである。母親は殆んど本能的にさうすることによつて自分の満足を感じ、喜を感じ、子の爲には寧ろ好んで、骨身を碎くことも辞しないのである。そこには苦痛も最早苦痛ではなく、困難も困難ではなく、苦の樂とか悲の喜といったやうなものさへがあるのである。或はむしろ困難も苦痛も悲哀も超越したものがあるといつていゝかも知れぬ。少くとも第三者から見ると馬鹿／＼しい困難であり悲哀であり苦痛であるものが、當事者にあつては何でもないのである。只それ本能の喜があるのみである。自分の子が苦み悲むのを見ては冷然としてゐることは出来ないのである。身を以てさへも之に代ることが何でもないのである。それが却つて喜なのである。ほかん／＼して見るなどとは到底出来ることではないのである。それこそ却つて本能の苦痛なのである。

之を要するに母親が子の爲に苦み惱み悲みながらも、それを苦みともせず悲しみとも惱みともしないのは、彼がそこに本能的に自己陶醉の世界に遊んでゐるが爲である。

比較的純粹にして、比較的美しい自己陶醉は母性の愛である。けれども割合に美しい母性愛にも、煎じつめて見るこなほ可成りに不純のものがある。子供の好む所が危険であるとか、子供の望むところが時勢に逆ふものであるとか、その一生にこりて、明によからぬものであることが、最進んだ眼から見て明白であるといはゞともかく、その結果が必しも明ならぬのみか、むしろいゝかも知れぬやうな場合にも、母親は（多くの場合父親でも）強ひて自分の好みや、狭い意見や、古い思想や、いたつて固陋な所信に従はせようとし、さうすることに子としての進むべき本當の路と、安全とがあることを強ひようとし、甚しきは自ら子を極愛するが故に、自己の意志や感情の下にその子を全く屈服せしめようとし、又さうされることを以て専ら善良の子であるが如く見んとするものさへある。

かういふことが果して絶対に純真な母性の愛だといへるであらうか。本當に子を愛するといふならば、自己の希望や感情や意志は之を曲けても、出来るだけ子の好む所に従つて進ましめ、時勢に鑑みつゝ之を善導して誤なからしめるやうにすべきではなからうか。——少くとも自分の感情の一切をすてゝも子供の自我の正しい發展を助けるのが眞の母性の愛であるべきではなからうか。所がかうした絶対に純真な母性愛といふものが、今の世に澤山に見出されるだらうか。

試に自分の子と隣の子とが、二人一所に井戸に落ちようとしてゐたとする。之を見た、母親は一体どつちを先に助けようとするだらう。彼女は必ず夢中であるべき時に、夢から覺めて自分の子を先に助けようとするのが普通ではなからうか。同じ母の愛といつても、己が子に對する愛と、他の母の子に

對する愛との間には、かうして可成りに差別のあることを考へても、親の愛が必ずしも絶対に純粹なものでないことは直ちにうなづけるであらう。かうした幾分の不純な分子を含んだ母性愛が、子に向つて極めて強烈に對立した時にどんな結果が起るものであらうか。

子供が母より氣が弱いとか、従順であるとか、不賢明であるとか、思ひやりがあるとかすれば、そこには何事も起らないですむであらう。けれども子供の方が母よりも強い氣質の持主であるとか、正直であるとか、若しくははより賢明であるとかしたらどうであらう。まだく子供が偽善者であり、偽善を甘んじ、或は盲目的にそれを喜び、平氣で母の前に立てるものであつたとして、おめでたい母親がそれを偽善と氣附かなかつたとしたら無事である。けれども子供が極度に理性的であり、愚直であり、眞に目覺めた、意志の強い氣質であつて、それが母親の盲目的な、淺見な非理性的な自我的な愛の前に立つたとしたらどうであらう。母親が愚かで終れば何でもないが、少しでも目覺めた時の淋しさは果してどうであらう。子は結局自分の一部でもなければ、自分の生命其物でもなく、一個の自我の主人公であり、子供と自分とは二つの個性の對立であると思つた時にはどうであらう。

まだく子供が獨身である場合はいゝ、子供が妻を求め、又は良人を得た場合にはどうであらう。多くの場合に於て、夫婦は本能の力によつて、親に對するよりも、もつとく力強く結合する。少くも夫婦の結合當初暫くの間は、二人の間には母なるものゝ存在さへ極めて薄弱なる力に過ぎない場合が時々ある事を私達はきかされてゐる。かうした際に於ける親と子との間はどんなものであらう。

夫婦の愛情が濃かなればなるほど、母親が之に對して嫉妬を起すきはよく耳にすることである。子に對する自我的陶醉はこゝに恐ろしい幻滅となり、甚だ妙なものになつて來るのは當然ではなからうか。子に對する愛着が嫉妬に姿をかへるのはまだいゝとして、こゝにいよいよ親子の間の愛といふものは實に妙ちきりん限りなきものになつて來るのではなからうか。

然も此場合に於て、子供が偽善者であるとかその配偶者が圖々しい強いものであるとかすればまいが、夫婦が強者でもなければ偽善者でもなく、さらばといつて偉大な人物でもなくて、假りに神経質な小さな人物であつたますると、親との間の感情はどんなにかまづいものとなり、殊に母親の淋しさ悲しさいつたら想像の外ではなからうか。そしてこの悲しさ淋しさは、兩親たるものゝ心持に於て、自我的な不純なものが多いければ多いほど大きく、子を愛することは要するに自我の下に強いて子を置くこゝでなくて、子供の自我の下に子を放つこゝにあるこゝを知つて、善く之を導びかう努力するにあるこゝを知つてゐるだけ、その悲みは弱く薄いものではなからうか。

して見るこゝ戀愛は惜みなく奪ふと同時に惜みなく與へるものであるが、親の愛は之と趣を異にして、少しも奪ふことなくして、只々惜みなく與へるものでなければならぬ。考へて見れば可成にたましいものではないか。而もかくてそこに實に無私無慾なる眞の大愛への第一歩があるのである。かういふ風に考へて來るこゝ、母性愛の強調は西洋諸國のやうな親子の關係のあつさりした國に於てこそ其意義が愈強大であつて、ケー等によつてそれが主張され出したのも面白いことだと思ふ

愛の理想化

有島氏はいつた。愛は惜みなく奪ふと、愛する對象をこゝまでも奮ひきらねば満足を感じないのが、戀愛の一般的傾向である。之に對して愛せらるゝものは、また已を愛するものに對して、惜みなく與へるこゝを以て満足する。與へるものと奪ふものとの間に、何等の差別もなければ、何等の惜しみも苦痛もない。否そこには只満足があるのみ。恍惚たる融合があるのみ。渾然たる自我の陶醉、そのほかには何の影の存在もなく。そこには只白熱の輝があるのみ、詩があるのみ。

けれども我々の自我は必ずしも常に渾然として融合してゐるものではない。別々の自我は時に脊中合になつて活躍する。惜みなく奪はうとしても、惜みて與へまいとする。そこに呪はしい憎悪が現はれる。恐ろしい悲劇が生れる。けれども我々が此處に此呪はれたる戀愛を理想化して、奪はんとしても、與へざるものをも愛し、與へざらんとしても奪はんとするものを憎む心を自ら呪ひつゝ、汝の敵をも愛し、一切を愛することを得るに至つたましたらさうであらう。淋しいから愛せられたいといふことの代りに、自分が淋しいからには人も亦淋しいにちがいない、即ち自ら淋しいが故に、他が已を愛すると愛せざるとに論なく、之を愛したい。かうしてその爲に悩み、その爲に苦しむ。利己の爲にでなくて、已をすてた無我の愛、奪ふ所の愛でなくて、與へる所の愛、愛せられんとする消極の愛でなくて、進んで愛せんとする偉大なる積極の愛、そこに佛陀の愛があり、基督の愛があるのだ。

佛の慈悲と云ひ、親子の愛といひ、夫婦の愛といひ、男女の戀愛といひ、多くの人は皆之を別々に論ずべしといふも、畢竟これ愛他的本能のさまざまの發現であり、その本質に於ては各異なるものと雖ども、要するに自我陶醉のいろいろの現象に過ぎないものである。而もその利己的な慾望の分子の最も多い點に於ては戀愛が第一位にあり、惜みなく與ふるといつても、そこには必ず報酬を要求して已まぬものがある。従つて報酬のない戀愛は悲劇を生まずにはおかぬが普通である。

親子の愛に至つては、割合に純潔であるといふものゝ、なほそこには、幾分の不純なものが含まれてゐる。親は自らを慰めんが爲に、自らの喜の爲に、知らず／＼本能にかられてその子を愛してゐるのである。だから時ありて自らの愛撫に裏切られたりした時には、さんさんの怨み言を述べたりすることもあり、又時には、まるで仇敵に對するやうな態度をとるやうな場合さへある。かういふやうなのは例外であるにしても、親子の間の愛が絶対に純潔なものでないことは、同じ子といつても、自分の生んだ子の間にも愛情の差があり、まして自分の生まない義理の子と自分の本當の子との間には愛撫の度がまるで問題にならぬまでに異なるのも知ることが出来るのである。

そこへ來ると基督の愛や佛の慈悲は絶対である。一切平等無差別の愛である。愛他的本能は此處に至つて全然無我的である。圓滿無量無私無偏である。近代のやうに個人主義的利己的思想が濃厚になるにつれて、親と子との愛を強調すること以上に、理想化されたる人道的聖愛の高調に一層の大きな意義がありはしないだらうかと思ふ。

人生と夢と睡眠

人生の本質

人間ほど矛盾の多いものはない。

現實に憧れながら永遠を求め、不變を希ひながら變化を要める。

だが現實とは何か、永遠とは何か。

目に見るどころ、耳にきく所、ありのまゝの事相、これを現實といふ。けれども目に見る所の相と云ひ、耳にきく所の事實といひ、悉くこれ流轉變化極りないものではないか、今見たところと、次に見る所と異り、昨日聞いたところと今日聞く所とは異なる。一切萬法決して不變のものなく、流轉變化極りないものゝすれば、永遠とは要するに流轉の繼續といふことではないか。

果してさうであり、またさうだと信じて、吾々が現實に即しながら永遠を求めてゐるのならば、いふけれども事實は恐らく反對である。決して流轉の世相を見極めて、その繼續にあこがれてゐるのでなくて、流轉の姿に嫌きたらないで、不變の永遠に憧れてゐるのである。宇宙の本質が轉變であり流轉なるが故に、却つて不流轉不變を求めてゐるのである。不可能なる事實と知つて絶望するのでなくて、不可能なりと知りつゝ求めてゐるのである。そこに人間の悩みがあり悶えがあり苦みがある。

あり、人生の一切の矛盾が生れてくるのである。そこに藝術が生れ、宗教が生れる。不可能と知りつゝ求めるのが矛盾でなくて何であらうか。人生は實に大なる矛盾の集りであると同時に極りなきロマンチックなものである。

流轉ミ矛盾ミロマンチック！ これ實に人生本質の一面である。

青年の夢

現實を不變なる真理の顯はれの世界の如くに認め、不變の真理の徹底を現實の世界に求めるのは空想である、夢である、ロマンチストのことである。

宇宙の大法に徹せず、表面の事實と、一面の真理にのみしか目のつかないものは、自らロマンチストであると知らず、眞實なる真理の追求者であるを信じ、リアリストであるを信じて、此空想を、此夢を現實に徹底させようとしてあくまで追求する。

青年時代の私は明にそれであつた。肺病になりはせぬかと考へて、のべつに心配してゐた。肺病の微菌をのんではゐないかと思つて朝夕心配した。此心配は殆んど毎日のやうに私の心を襲つた。醫者はいつた。吾々はのべつにいろいろな微菌をのんでゐる。而もそれが活躍しないやうにしさへすればいいのだ、それにはこちらを健康にしてをることだ。さて微菌をのんで肺病になつたらどうだ、或程度まで治つて、全治したを信すればさうだ。醫師はいふ、それでいいのだ、全治したのだ。かう考へると真理の徹底とは何のことだを云ひたくなる。只さうだと信ずることである。流轉が宇宙の

真理だを信じ、不變なるもの現實界になしと信ずる。幾度か死を求めた私も、かう信じかうさつて、矛盾に驚かず流轉に興味を感じるに至つて、もう求めて死ぬる必要もなくなつた。死はもう何の脅威でもなくなつた。富も名も利も地位も私にはもう憧れの光でもなければ私を壓する力でもなくなつた。

青年時代の夢やうやく醒め來れば、蚊柱の如き、うごめき返す人生また一興ではある。

睡眠の幸福

人間の生活ほどロマンチックなものはない。眞、善、美に對する憧憬や陶醉や、自由、平等、平等等の希望や理想の追求、思へば何れかロマンチックならざるものがあらう。

その間にありて、最もロマンチックなものは睡眠の世界である。睡眠の世界は薄明の世界よりも夜よりも、もつと詩的である。むしろ詩そのものであり神秘そのものである。適當な時に適當に訪れた睡眠！ それは恐らく人生最大の幸福ではなからうか。

そこには一切の悩みも苦みも悶えも全く影を收めてしまつて、あるものは只甘美なる平和と心地よき忘却！ おゝ得もいはれぬ痛快な夢の飛躍よ、あゝ罪なきロマンチックの極致！

古來幾多西歐の詩人が之に憧憬し之を讚美したのは自然ではあるまいか。

けれど私は小さい時から餘りに多き睡眠を呪つた。一日一時間宛多く眠る、それか五年十年と積んだ時に、どれだけ多くの人生を忘却と無意義の中に消すことであらう。生きてゐながら死んでゐる

と同じではないか。かう考へた私は矢張現實主義者であつた。

長ずるに及んで私は相似たる主義の主張を發明家エヂソンに見出して驚喜した。エヂソンは一日四時間以上眠ることを呪つた。書齋の中にはいりこんで、四時間を眠る外は常に研究に夢中になつてゐる。彼と同じやうな努力の経路を歩んでゐながら、私は自分の進むべき経路をあやまつたことを悔いてゐる。私は詩人的経路を歩むにはあまりに現實主義者であつた。而も私はまた事實に於て甚しい理想主義者である、ロマンチストである。私が睡眠をきらいながら睡眠を愛するのはこれが爲である。睡眠の花である夢を悔りながら夢に憧れてゐるのもこれが爲である。

昏睡の美人

最近米國ジョンス・ホプキンス大學のリヒター博士は、人体の電氣的抵抗を測定する器械によりて睡眠には少くも二つの明晰なる差別あることを説いて、一つは眞の睡眠で脳髓と神経と筋肉とに完全な休養を與へる。今一つは一種の昏睡である。一種の心的疾患が起る状態で、眞の睡眠に酷似し一寸見たゞけては、本當は熟睡しないで、自覺の状態にあることを見分けることが出来ないものだといつてゐる。

肉体の睡眠や精神の睡眠はいゞけれども、理智の睡眠や昏睡はあまりに悲惨である。他人には眠つてゐる如く見えて、事實はちやんと目覺めてゐるのでなくて、その反對に、自分では自覺してゐると云ひ、又さうだと自負してゐながら、事實の上の彼の行動は、常にそれを裏切つて、さながら昏睡

状態にあるものゝ如く、他人にもまた眠り切つてゐるとしか見えない昏睡の眠は悲惨といふよりもむしろ憐れである、而も此昏睡者は千人中九百九十人までである。目覺めてゐるに云ひながら信しながら、環境は因襲は依然として昏睡をつゞけさせてゐるのである。日本の婦人の多くがまだこの状態にあるのは氣の毒を通り越して皮肉である。

現實に徹底する信仰

私のまだ若い時、田舎の私の村に眞宗のお塊りがあつた。彼等夫婦は暇さへあれば寺へまいつた。寺へ詣つてはちよこくと手品をやつた。雨とふるお賽銭をあつめては、取かへてもらうさいては兩方懐にして歸つた。自分の家の土藏に積みこんだ米の周圍は、ぐるりくと廻られるやうにして、賣るゝなると南無阿彌陀佛といつて、必ず針をさしては水を吹きかけた。従つて此家の米は必ず二三十錢安くなくては買手がなかつたさうであつた。

また私の知つてゐる坊さんは、お布施がたまると廓へ遊びに出かけた。今一人の坊さんは、お布施の収入を見越して抵當にして、前借をしては遊びに耽つてゐる。

こんな實例は何れの宗教と宗派をとはず、さがせばさらにあることであらう。かうした信仰と現實との矛盾の根柢はそもく何にあるだらうか。一寸考へて見たいやうな氣がする。

思ふにその一つは現實と死後の世界とを、時間的に二つに分けて考へてゐる處にあるのではなからうか。死んでから地獄にゆきたくないから現實の世界で後生の安逸を願つておく。安心して大往生を遂げたいから佛を信する。かうして死後の生活と現實の生活との間に餘りに大きな區劃をた

てる。それが恐怖心に伴はれて信仰を生み出すのではなからうか。そこには道理もなければ理屈もない、死といひ、死後の地獄生活といふ思むべく恐るべき想像を根柢として信仰が生れるものであるだけに、やゝもすると現實の生活とはそれが全然異つたものであるが如く感ずる。死と死後の生活を現實の一部であり、時といふ一つの流れの間に起る出來事と見まいとする。そして現實の生活には直ちにその結果が現はれると信じないからこそ、動もすれば現實に於ける所信とは全然異つた生活をやらうとする。殊に信仰に厚きものこそ却つて、他に依頼して自己の罪惡を逃れようとする、かうした考が以上のやうな矛盾を引起すのではなからうか。此矛盾はやがて動もすれば宗教的信仰に厚いものをして却つて罪惡を犯したり、卑劣な行を爲さしめたりする。衆生濟度の身でありながら、救はるべき衆生よりも却つて賤しむべきあさましい態度に出たりする。信仰の薄いものよりか、厚いと誇るものの方が却つて腹の見えるやうな醜陋な陰險な行動に出ることが屢ある。

けれどもこれは耶蘇教にしろ佛教にしろ、其他の何れの宗教にしろ、凡てが餘りに多く教理に囚はれたが爲であつて、(一)現實になつて現實を無視しないといふならば、いつそ現實に徹底する事によつて、(二)若しくは又死後の生活に重きをおくといふならば、それに徹底して現實の生活を輕んずる事によつて、此矛盾した人間の生活を救ふこゝが出来たものではなからうか。然るに在來の宗教は、餘りに現實の生活を逃避し過ぎたと非難されたが爲に、只徒らに現實にかゝはらうとし、時の點に於て現實と未來とに明確な差別を強ひてつけようとしながら、事實に於てはつけ得ないといこ

ろに此等の矛盾の根柢があるのではあるまいか。

死後の生活や天國や極樂淨土の生活を理想として求めることに人間生活の理想があるといふならば、それを徹底的に現實生活に押し進めて、現實を天國や淨土に引上げるこゝによつて一切の不正邪惡を徹底的に否定したかどうか。一切の邪惡不正を否定することの代りに之をも尙救ふべしとして、現實に理想を徹底させようといふならば、むしろもつと理想を現實の世界に引下ろして一切の宗教がもつこゝ現實的になつたらどうか。

しかも現實にゐながら足は中有をぶら／＼してゐる。雲の上から現實の人間の頭をなでゝゐる。これだからこそ現實の世界は矛盾だらけだ。ゑらさうなこゝをいつてゐながら陰險なこゝを盛にやるのだ。陰險卑劣な生活に耽りながらペロリと顔をぬぐつてゐるのだ。

今日の有ゆる思想的傾向からいふと、宗教が本當に立派な宗教でありたいならば、天國や極樂は即ち死後にあるのでなくて、現實にのみ存在するこゝ説き、現實を理想化することに強調したらどうだらう。それでこそ始めて生きた宗教であり人間の世界に役立つ宗教ではないか。そんなことは最初から分り切つてゐる、分り切つてゐながら容易に足がぬけないこゝに、今の宗教の弱點がある、無力の原因がある。矛盾の根柢があり、人間界の混沌たる根柢がある。

寂寥を超越する者

私は近頃私の友人——昔の昔に教へたことのある——から次のやうな淋しい手紙を受取りました。そして私はしみ／＼とそれに動かされました。私は此友人に對して返事をかく代りに、此友人の手紙をかりて、大部分を此處に掲げつゝ公開の返答をかいて見たいと思ひます。いふまでもありません、此友人は、丁度私が青年時代からふみ來つたと全くといつてもいい位な、同様な歩み運びつゝあるからです。そして私は惱みに惱み、悶えに悶え、苦しみに苦しんで、人生の寂寥と悲痛を通り越して、今日の心まで到達して來たからです。そしてそれが此友人に對してのみならず、世間のいろ／＼の方に對して、参考になるだらうと思ひ、またなつてほしいからです。私はまづ此友人の手紙を掲げることにします。——

二

生活の爲とは云ひながら、いやな人々と、いやな仕事をしに、汽車にゆられて大阪までも、働きに行かなければならないかと思ふと、しみじみたまらない氣がします。

でも日曜日の午後から暇だったので、京都へ行き、南禪寺の木立を歩いた時、あの暗い木蔭から、

僅かばかり青空の見えたのが、何かしら自分の人生にも、こんな思ひもよらない空でも見える日がありやしないかと、そんな頼みにもならない光りを考へながら、ぶら／＼しました。

先生、僕はこの頃どうしていゝんだかわからないで居ります。

今のこの不安心の氣持で、これから先の與へられた人世の旅を、さうして生きて行つたらよいのかわからないのです。僕は別に死と云ふものを恐れてはるません。けれど死にたくはもう少しないと思ひます。只もつゝ安らかな、伸びやかな子供の時遊び疲れて、夕方灯のともつた家へかへつて行く時の様な、温い湯氣のたつ食卓を思ふ様な氣で、一日でも生きられたら願ひます。

道——そんなものが、この頃ほしくてならないのです。その道を歩いたら、どんな寂しい人の心を見ても、辛い思ひをしても、一人ほつちでゐても、温い落ちついた心もちで歩いて行ける、そんな道がほしいのです。

小さい時から都會に育つた私には、自然の美しさとか偉力とか云ふものに對して、驚きもし稱讃もしはしますけれど、それによつて自分が慰さめられ、力づけられ、そして自然を愛して行くと云ふ氣にはなれないのです。

やつぱり街の火を愛し、人の心を求めてしまひます。今夜の様にこんな靜かな晩ですと、僕はしみじみと色々な人の心を思ひ出します。

僕にはまだ僕の様なもの、信賴して生きてゐる年老ひた両親がありますし、若い兄や姉もあり

ますし、なつかしい友もあります。

先生、それでゐる僕はどうしてこんなにも一人ほつちの様な寂しさを感じるのでせう。先生にだつて僕はとうに御目にかゝつてゐなければならぬのです。その申譯なさは何時もひし／＼胸に感じて居ります。自分で殊更に自分の寂しさを作る。そんな氣も致します。

時々街の中を歩いてゐて、私は澤山の人々をすれ違ふ時、この中に、この多くの人々の中に、何故、人生の途上でガツチリと心がふれ合つて、愛と信と情と熱とで、御互の總てを抱きかゝえてくれる人はないのかと考へると、物狂はしい氣もちになる事があります。そんな時誰一人として、僕と云ふ存在には何等交渉のない人々であつた事を知つて、云ひしれない寂漠の世界へつき落されてしまふのです。そして全く私に友だちのない事を感じてしまひます。

三

さてS君、私も丁度あなたと同様に、いや私はもつ／＼中學時代から人生の不信と不公平と不正とに對して無限の憤懣を感じるに同時に、人生の何物をも頼るに足らぬことを痛切に感じて、不孝の子となつて父を欺いて文學に志ざし、死なうとしたことが幾度あつたか知れませんが。然しそれは決して戀などの爲でもなければ、單なる悲觀の爲でもありません。人間の世の寂しさと忌はしさとにしみ／＼と泣き、自分の周圍が自分とは一向に交渉もなく、關係もなく、考へれば考へるほど馬鹿々々しくなつたからでした。私は友を求めて眞の友を得ずして、され丈か惱んだでせう。幾度かふり

すてられ、今日でさへも見事にすてられつゝあります。その中に私は最も自分の愛してゐた自分の一人の子の、十四歳になつたのをなくしてしまひました。私の悲みと寂しさはその極に達しました。

けれども、道極まつて却つて道通すで、此時から私は始めて前途に光明を見出すことが出来たのでした。少しも宗教の力をかりたのではないですが、私は考へに考へた末に、自分の大なる過去の誤を發見したのでした。

私の淋しいのは、心が空虚なるが故だ、それを充さんとして淋しみを感ずるのだ。そしてその空虚を充さんとして、之を充し得るものを外に求める、物に求め、金に求め、地位に求め、名に求め、友に求め、要するに自分以外に求める。これがそも、根本の誤だ。宗教だ、文藝だ、學問だ、そんな自分の外のものが、何でわが空虚を充し得るのだ。自然が何で我を慰め得るのだ、人が何で我が淋しさを補ひ得るのだ。此等の自分以外のものによつて、我々が慰められるといふのは只自分以外のものを材料として、之に酔はんとするので、それによつて自分を誤魔化さんとするのだ。酒飲みが酒を飲んで自分をこま化すのと同じだ。自我の陶醉を求めるだけだ、要するに人間の世界はさまざまのものによつて、自我の陶醉を求めてゐるのだ。そして遂に求め得ないで泣いてゐるのだ。

四

かう考へた時に、眞に我が淋しさを慰するものは、宗教でもなく、文藝でもなく、科學でもなく

只自分のみだ、我のみだ。その我とは何だ、それは只自ら他を愛し得る力だ。自分の淋しさをいやすべきものを他から求めるのではなくて、他の淋しさをいやしてやるべきものを自ら創り出し、自らその地位に立つことによりて、人類を一步一步幸福の地に導びくその根本の道に酔ふこと、これが人間最高の理想でなければならぬ。他人によつて酔ふのでなくて、他人を酔はさうとする道に自ら酔ふこととしてその爲に一生努力すること、そこに大なる道があるのだ、私はかういふ結論に達したのでした。かくして私は世間によりて慰さめられるのではなくて、私は世間を酔はすべき使命をもつべきだとの考へに酔つて來たのです。そしてそれから後の私は少しの淋しみもなければ、悲觀もなく、人生の最後の道が始めて分つて來た様に思ふのです。

私の道は決して宗教の道ではありませんが、何だか釋迦の道も基督の歩みも分る様な氣がします。S君、あなたは濫い道を求めてゐられながら得ないでこまつてゐらつしやるやうですが、それは自分以外に求められるからではないでせうか、あなたの両親、友、兄弟、世間、それが結局あなたに對して遂に何の力になり得るでせう。絶対に何の力でもありませんことを私は斷言します。

あなたはまだ自分には自信がないから、お前のやうには進まれないといはれるかも知れぬが、大なる悲に出遇ふと同時に、そむきにそむかれ、欺きに欺かれると、私達は眞にたよられぬ物さ、たよれるものとの差別がはじめて分つて來ます。それまでは駄目かも知れませんが、決して自信なんかぢやありません、知るのでした。直覺するのでした。

只自分の爲にでなくて、他の爲、人類の爲、人類の眞の幸福——決してある人々のいふやうな一時的なものであつてはなりません、社會主義のみは決して眞の幸福の最後の到着点ではないでせう——の爲といふ唯一つ焦點に向つて活動するそこにのみ眞に生きる、價と道とがあると私は信じて來たのです。かくして私は心の空虚を一抔に充せました。温かなる希望の光が、冷靜な、星の光のやうな輝に照された道が、燦然として眼の前に現はれて來ました。これは決して宗教的熱情の結論ではなく、合理的な考察の後に到達した超人的理性であつて、私は凡ての人間にかくあれと期待し、またかくあることによりてこそ人間が文化の最高點にまで進み得ると信ずるのです。

國寶六代目を惜む

一

歌舞伎劇はいふまでもなく傳統である。音楽や科白其他さまざまの形式を通じて、感覺的陶醉を求むる傳統的表现に外ならぬものである。此傳統的表现を取除く時に歌舞伎劇の意義は甚しく價値を減殺されることはいふまでもない。けれども此傳統なるものはどこまでも變化しないものであらうか。よし變化してならぬといつても、それが少しも變化しないのであるであらうか。或は時代の空氣によつて、或は其繼承者によつて、意識的に、又は無意識的に、多少の變化をするのは已むを得ないことではなからうか。殊に觀客と時代とを對象としようとする時に、そこにさまざまの變化が現はれて來るのは、自然の勢ではなからうか。表現さるべき内容が、其處に流れてゐる思想的傾向にあるといふよりも、簡單なる限られたる思想の下に、一種の感覺的陶醉さへ引起せばよいといふ時に、殊に傳統の變化といふことが最も多く起り勝ちではなからうか。

二

嘗て小山内薫氏がデ・アルキン氏の日本演劇觀を評して後に、「本來の歌舞伎劇を、而も可成り新しい生命力をもつて、傳へ得る殆んど唯一の歌舞伎役者たる菊五郎が、到底歌舞伎の世界へ持込む